Journal of Asian and African Studies, No.78, 2009

【論　文】

16–17 世紀アナトリア南東部のクルド系諸県におけるティマール制

齋　藤　久美子
（アジア・アフリカ言語文化研究所）

Timar System in Southeastern Anatolia from 16th to 17th Century

Saito, Kumiko
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

This paper analyses the enforcement situation and the characteristics of the *timar* system in Kurdish *sancak*s (subdivision of a province) governed by Kurdish *amir*s (chieftain) in southeastern Anatolia.

After the conquest of southeastern Anatolia in the 16th century, the Ottoman Empire integrated the territories of Kurdish *amir*s who had governed the region as *sancak*. In the late 16th century, Kurdish *sancak*s were gradually classified into two categories, *sancak*s and *hükûmet*s. The *amir*s who ruled *hükûmet* held a right called *mülkiyet*. Under *mülkiyet* an exemption from land survey was granted, and all the tax income belonged to the *amir*.

Throughout the 16th to 17th centuries, the *timar* system which had been introduced among Kurdish *sancak*s had two components; one was a continuation of their privileges, wherein the system called *ocaklık* granted the *timar* inheritance not only from father to son, but also an inheritance within a family tribe. Also, Kurdish *sancaks* were able to own *timar* by an estimated value or unknown value, without having to assess the land values through official land surveys. Another component was the transition to the ordinary *timar* system; it meant that certain privileges, such as holding *timars* without proper land surveys, had been abolished. In addition, an attempt to integrate *hükûmet* into the *timar* system was observed in the same era. The *timar* system was introduced in the limited areas of *hükûmet* which originally did not require a transition to the system. Furthermore, *timar*s were awarded to *amir*s who ruled *hükûmet* in other *sancak*s.

This paper concludes that the *timar* policy towards the Kurdish *sancak*s in the Ottoman Empire aimed at broadly integrating them in the *timar* structure, while sustaining the exemptions and privileges in the *timar* system.

Keywords: Ottoman Empire, Southeastern Anatolia, Timar System, Ocaklık, Hükûmet

キーワード： オスマン朝，アナトリア南東部，ティマール制，オジャクルク，ヒュキューメト

はじめに
1 『ディルリク発給簿』に記録されたテズキレの内容について
2 クルド系有力家系とクルド系諸県
3 クルド系諸県におけるティマール制の実施状況
3-1 クルド系県知事のディルリク
3-2 クルド系県知事の関係者のディルリク
4 クルド系諸県におけるオジャクルクと租税調査
5 クルド系諸県における特殊なディルリク
5-1 推定額のディルリク
5-2 額が無記載のディルリク
おわりに

はじめに

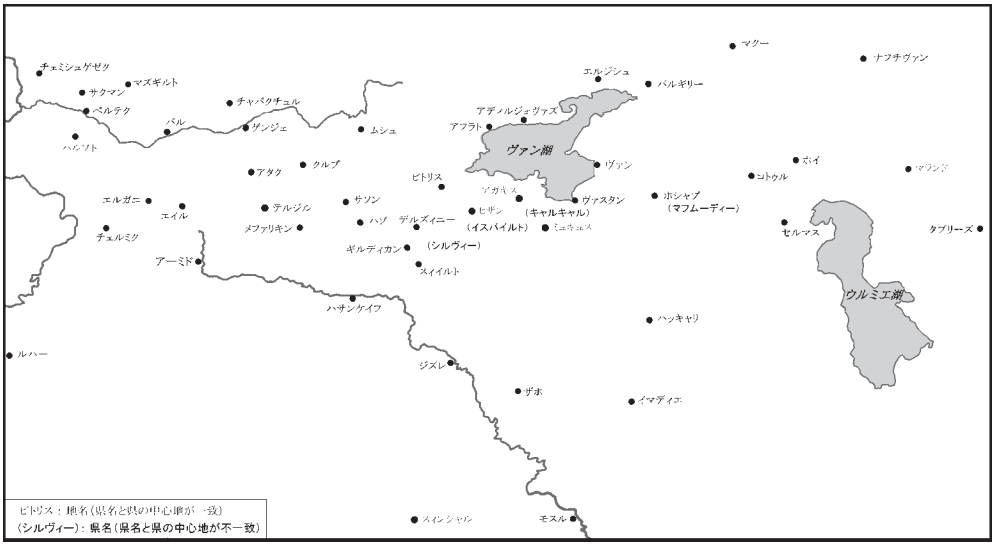
16世紀前半，オスマン朝の数度にわたる東方遠征の結果，サファヴィー朝支配下にあったアナトリア南東部のディヤルバクル地方とヴァン地方はオスマン朝の版図に入った。この後，特にヴァン地方はサファヴィー朝に対する前線基地として重要な軍事拠点の1つとなっていった。この新たな辺境地域での軍事活動で活躍を期待されたのがアナトリア南東部でクルド系部族連合を率いたアミール（以下クルド系アミール）たちであった。オスマン朝は，軍事奉仕の見返りに，クルド系アミールにいくつかの特権を認めた一方で，彼らを支配体制に組み入れるための諸策を実行した。その1つがティマール制の導入である。

15世紀後半以降，オスマン朝が中央集権国家として発展していくなかで，オスマン支配を支えたのがティマール制を軸とする軍事制度であった。「軍事奉仕の代価に授与される収入源（＝徴税権）」を意味するディルリク（dirlik）は，授与額に応じてティマール（tīmār, 2万アクチェ以下），ゼアーメト（ze‘āmet, 2万～10万アクチェ），ハス（ḫāṣ, 10万アクチェ以上）と区別された[1]。地方においては，州単位の軍事・行政責任者である州総督（mīr-i mīrān）と県単位の軍事・行政責任者である県知事（mīr-i livā）がハスを保有する一方で，ディルリク保有者の大半を占めたのはティマールを保有する騎士（sipāhī）であった。遠征時，騎士たちは上官でありゼアーメト保有者のアライ・ベイ（mīr-i alay）のもとに参集し，県知事さらに州総督の指揮下に出征する仕組みになっていた。このようにティマール制は地方行政組織と軍事組織を密接にむすぶ制度であった。

オスマン朝は都市や農村における税収をディルリクとして設定・配分したため，ディルリク授与には租税調査の実施が前提となった。都市や農村の担税能力を把握してはじめてディルリクの分配が可能になるからである。租税調査は基本的に県単位で実施され，その結果をもとに2種類の租税台帳が編纂された[2]。1つは明細帳（defter-i mufaṣṣal）と呼ばれ，都市や農村の担税者，税目，税額などが記されている。もう1つは簡易帳（defter-i icmāl）で，ディルリク保有者とその収入源となる税目や税額などが記されている。ティマール制の実施にあたっては，税制度にも大きな影響を与えたことが見て取れる。

このようなティマール制の性格を考えると，ティマール制が施行された地域とは，より中央の支配が及んだ地域であるともいえる。オスマン朝が新たな征服地にどのように

1) ディルリクは「ティマール」とも総称される。つまりティマール，ゼアーメト，ハスを総称して「ティマール」と呼ぶこともある。これは「ティマール」がディルリクの同義語で史料に記載されたこと，さらにディルリク保有の多くがティマールであったことに由来する（Howard 1987: 8–9）。
2) 租税調査の実施と租税台帳作成のプロセスについては，İnalcık 1987: XVIII–XXI.



ティマール制を導入したか，その経過を考察することにより，オスマン朝の支配体制の一端を明らかにすることが可能となるだろう。本稿では，史料的な問題もあり，これまでほとんど検討されることのなかったアナトリア南東部のディヤルバクル地方とヴァン地方を取り上げ，両地方の旧支配層であるクルド系アミールとティマール制の関わりについて検討する。

オスマン朝による征服後，アナトリア南東部のクルド系アミールの支配領域を含む地域では，1515 年にディヤルバクル州，1548 年にヴァン州が創設され，両州に属する県はオスマン官人が任命される県とクルド系アミールが任命される県に大別された。オスマン官人が管轄する県とクルド系アミールが管轄する県の大きな違いは，クルド系アミールが管轄する県では県知事職の世襲が認められたことである。このようにクルド系アミールは自身の支配領域を県知事として世襲管理することになった。本稿では，県知事となったクルド系アミールをクルド系県知事，クルド系県知事が管理した県をクルド系諸県と総称する。クルド系諸県は，16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて，徐々に「リヴァー（livā）型」と「ヒュキューメト（ḥükūmet）型」の 2 種類に区別されていった[3]。17 世紀に執筆された『法令集』によると，この違いは原則としてティマール制の有無によっている[4]。つまりリヴァーではティマール制が実施され，ヒュキューメトではティマール制は実施されなかったというものである。

オスマン朝の東西の辺境地域において特殊なティマール制が存在し，軍事奉仕の見返りに私有に近いディルリク保有が認められていたことは，以前から知られていた[5]。本稿で対象とするクルド系諸県も特殊なティマール制施行地域の 1 つと考えられている。しかしクルド系諸県でのティマール制については，その特殊性が詳細に分析されることなく，従来のティマール研究のように，租税台帳を主史料に一部の県のディルリク保有者やディルリク額など，ディルリク保有に関わる事実のみが紹介されてきた[6]。さらにクルド系諸県

3）　クルド系アミールの支配領域が県として編入される過程については，齋藤 2006b.
4）　‘Ayn‘Alī Efendi, *Ḳavānīn-i Āl-i ‘Oṣmān der Ḫulāṣa-i Meżāmīn-i Defter-i Dīvān*, 29–30; *Sofyalı Ali Çavuş Kanunnâmesi*, 19, 32.
5）　Barkan 1979: 295–6. ティマール制の史学史的背景と研究の展開については，三沢 2006.

ではティマール制施行にも関わらず租税調査が行われなかったケースや，そもそも租税台帳が伝世していない県もあるため，租税台帳以外の史料利用が不可欠であった。つまりクルド系諸県におけるティマール制の全体像は依然として不明なままである。そこで，本稿ではクルド系諸県におけるティマール制の実施状況を整理し，その特徴を明らかにすることを目的とする。クルド系諸県での特殊なティマール制の構造の解明は，今後他地域のティマール制と比較検討し，オスマン朝のティマール政策を総合的に分析するために必要であろう。

クルド系諸県に限らず，これまでティマール研究の多くは租税台帳を利用することにより進められてきた。その理由として，租税台帳にある県における租税調査実施時のすべてのディルリク保有者が記載されていて，県単位でディルリクの保有状況を把握できることがあげられる。しかし通時的にディルリクの変遷を把握し，ディルリクの保有状況を詳細に分析するためには，『ディルリク発給簿 (Timar Zeamet (Ruznamçe) Defterleri)』を利用する必要がある。『ディルリク発給簿』については，以前よりその重要性が説かれていたにも拘らず，ハワードがアイドゥン県の事例を取り上げた以外に，同史料を十分に利用した研究は見あたらない[7]。『ディルリク発給簿』とは，ディルリク授与に際して，勅許状（berāt）発行のために必要なテズキレ（teẕkire, 有資格者であることを示す証書）の写しを記録したものである。上奏から勅許状発行までの過程が詳細に把握できる唯一の史料であり[8]，租税台帳には記載されていないディルリク保有に至る経緯と保有の条件，さらにその後の保有状況の変動について知ることができる。イスタンブルに所在する首相府オスマン文書館には，15 世紀末から 19 世紀中頃にかけて記録された 2 千冊以上の『ディルリク発給簿』が保存されている[9]。スルタンの即位時など特定の時期にのみ作成される租税台帳と違い，『ディルリク発給簿』はディルリク授与についてほぼ毎日記録された史料であり，ディルリクに関して連続した情報を得ることが可能となる。本稿では，主に『ディルリク発給簿』を利用して，これまで十分に検討が加えられてこなかったクルド系諸県におけるティマール制の構造を明らかにするべく，ティマール制の実施状況とその特徴について考察する。

6） クルド系諸県でのディルリク保有に関しては以下の研究がある。Ünal 1999; Bizbirlik 1993; Bizbirlik 1996; Bizbirlik 1999.

7） Howard 1987.『ディルリク発給簿』の紹介および解説は，Howard 1986; Howard 1987: 41–76; Göyünç 1996; Afyoncu 1997: 27–30.『ディルリク発給簿』は，首相府オスマン文書館において，DFE.RZ.d のほか，MAD.d，KK.d，TT.d に混在している（Howard 1987: 46–7）。

8） Howard 1987: 7–142; Afyoncu 1997: 47–58 に加え，ディルリク授与に伴う文書行政について分析した İnalcık 1980; Göyünç 1995; Aydın 2004 を参考に，上奏から勅許状発行までの過程を概観してみよう。
①手続きはディルリク保有希望者が属する県知事かアライ・ベイの上奏により始まる（ディルリク希望者本人の上奏もある）。②御前会議と邦訳されるディーヴァーヌ・ヒュマーユーン（dīvān-ı hümāyūn）で上奏が受理されると，上奏書は租税台帳を保管するデフテルハーネ（defterḫāne）に送られ，記述内容の真偽が調べられる。③デフテルハーネで確認され次第，ディーヴァーン局に上記書類が戻され, 命令（buyuruldu）が出された後（この時ディルリク地の州総督に命令（ḥükm-i şerīf）が送られ，テズキレの作成・送付が要請されることもある。），ディルリク授与関連の文書を作成・保管するタフヴィール局（taḥvīl ḳalemi）に送られる。④タフヴィール局での確認作業が終了すると命令（taḥvīl ḥükmü）が出され，デフテルハーネに書類が戻される。⑤デフテルハーネで勅許状発行のためのテズキレが作成され，勅許状がディルリク保有資格者に与えられる。この過程で『ディルリク発給簿』にテズキレの内容が記録される。

9） T. C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü 2000: 135.

図 1.（DFE.RZ.d 55: 1002 から抜粋）

①ビトリス県タティク郷　　高貴なる命令が与えられた
アフメトのゼアーメト　　ジェッマーセ県知事（のハス）から分離（して授与）

①nāḥiye-i Tātīk der livā-i Bitlīs　ḥükm-i şerīf verilmişdür
Ze‘āmet be-nām-ı Aḥmed　‘an ifrāz-ı mīr-i livā-i Cemmāse

②ḳarye-i Kīrḥ tābi‘-i m(ezbūr)　ḳarye-i Ṣāṣon tābi‘-i m(ezbūr)
ḥāṣıl 12976　ḥāṣıl 9373
yekūn 22349　buyuruldı ḥāṣ-ı mīr-i livā
ḥiṣṣe-i m(ezbūr) 20000

③mezkūr za‘īm Aḥmed bendeleri sābıḳā Bitlīs ḥākimi Şeref Beğ’üñ emekdārlarından olub yuḳaru cānibde ḳorçi iken iṭā‘at eden Şeref Ḫān ile ma‘an gelmeğin vilāyet-i Vān’da 20000 aḳçalıḳ ze‘āmet ‘ināyet olunub ve düşenden tevcīh edüb teẓkiresin veresin ki berāt-ı şerīfüm verile deyü 987 Cümādelūlā evāsıṭı tārīḫiyle müverraḥ ḥükm-i hümāyūn īrād etmeğin vilāyet-i mezbūrede müstaḳil ze‘āmet müyesser olmamağın Bitlīs sancağında defter-i icmālde Cemmāse ḥāṣları tetimmesinden 53000 aḳça yazar ḳurādan Tīl nām ḳarye Bitlīs sancağı ḥāṣlarına emirle ilḥāḳ olunub ve Tātīk nāḥiyesinde ẓikr olunan iki ḳıṭ‘a ḳaryeler za‘īm-i mezbūruñ ḳadīmī ocağı ve maḥlūldür deyü Bitlīs beği Şeref Ḫān mezbūr za‘īm içün istid‘ā etmeğin īrād eyledüği emr-i ‘ālī mūcebince istiḥḳāḳına bedel Cemmāse ifrāzından olan Kīrḥ ve Ṣāṣon nām iki ḳıṭ‘a ḳaryeden 20000 aḳçalıḳ ḥiṣṣe ze‘āmet olmaḳ üzre merḳūm za‘īm Aḥmed bendelerine defter-i cedīd-i ḥāḳānīden tevcīh olunub berāt-ı ‘ālī-şān içün teẓkire verildi fī ġurre-i şehr-i Rebī‘ülevvel sene 988

teẓkire-i Rıḍvān Paşa

②キルフ村　上（タティク郷）に属する　サソン村　上（タティク郷）に属する
（税収）計 12976 アクチェ　（税収）計 9373 アクチェ
合計　22349 アクチェ　命じられた　県知事のハス
（このうち，アフメトへの）割当分　20000 アクチェ

③前述のゼアーメト保有者アフメトは，前ビトリス・ハーキム，シェレフ・ベイの家臣であり，彼の地（サファヴィー朝）でコルチであった時，（オスマン朝に）臣従したシェレフ・ハーンとともに帰還したので，ヴァン州で 20000 アクチェ分のゼアーメト（授与）が決定された。（保有者がいない）空きのゼアーメトを授与し，テズキレを与えよ，我が高貴なる勅許状が与えられるようにと，987 年ジュマーダー 2 月中旬の日付で皇帝陛下の命令が発行された。しかし上述の（ヴァン）州でゼアーメト（授与）がかなわなかった。ビトリス県の簡易帳に（記録の）あるジェッマーセ県知事のハスの一部，53000 アクチェ分の農村のうち，ティル村がビトリス県知事のハスに命令に従い移譲された。そしてタティク郷にある上述の 2 村について，前述のゼアーメト保有者（アフメト）の古くからのオジャクであり，現在ディルリク保有者がいないことを，ビトリス県知事シェレフ・ハーンが，前述のゼアーメト保有者（アフメト）のために報告した。そこで発行されたいと高き命令に従い，それに相応しいジェッマーセ（県知事）のハスから分離されたキルフとサソンの 2 村の（税収のうち）20000 アクチェ分が，ゼアーメトとして前述のゼアーメト保有者アフメトに租税台帳に従い授与され，誉れ高き勅許状のためにテズキレが与えられた。988 年ラビー 2 月朔日

ルドヴァン・パシャのテズキレ

1 『ディルリク発給簿』に記録されたテズキレの内容について

本論に入る前にテズキレの内容に触れておこう。テズキレは大きく分けて①ディルリク地と保有者名，②ディルリクの内訳，③勅許状発行までの状況説明，という3つの部分から成る。例示した（図1　DFE.RZ.d 55: 1002）によると，①ではビトリス県に属するタティク郷（nāḥiye）にアフメトのディルリク収入源があることと，アフメトに決定したディルリクが元々はジェッマーセ県知事のディルリクの一部であることが示されている。②ではアフメトのディルリクの内訳がすべて小計・総額ともに記されている。2村からの税収の総額は22349アクチェであるが，アフメトのディルリクとして決定されたのは2万アクチェ分である。③ではアフメトの経歴とともに保有決定までの経緯が記されている。それによると，アフメトは元々ビトリス・アミール，シェレフ・ベイの家臣であったが，おそらくシェレフ・ベイの息子とともにサファヴィー朝に亡命した。その後，シェレフ・ベイの孫にあたるシェレフ・ハーンがビトリスに帰還する時に一緒にオスマン朝に帰順した人物である。1580年にヴァン州で2万アクチェのディルリクを保有することが決まったが，この時は保有に至らなかった。その後，ジェッマーセ県知事のディルリクとして簡易帳に記録されている農村のうち，ビトリス県にあるキルフとサソンの2村について，アフメトのオジャク（＝世襲的に保有する土地）であり，ディルリク保有者もいないことがビトリス県知事である前述のシェレフ・ハーンから報告されたため，上記2村の税収のうち2万アクチェ分がアフメトのディルリクとして決定された。このようにテズキレにはディルリク保有者のみならずディルリク自体に関する情報も詳細に記載された。

『ディルリク発給簿』に記録されているテズキレの内容は，上述のような①ディルリク授与に関するものだけではない。この他にも②勅許状の更新，③ディルリク額の変更（加増や不足分の充当），④紛失などによる勅許状の再発行，⑤ディルリクの確定や再確認など多岐にわたっている。

2　クルド系有力家系とクルド系諸県

オスマン朝征服以前より，アナトリア南東部のディヤルバクル地方とヴァン地方では，クルド系有力家系を頂点に，部族および部族連合による支配体制が存在していた。クルド系有力家系の家長であるアミールは部族や部族連合を統率したが，その出自はいずれの部族にも属さない独立した家系からであった。クルド系有力家系については，クルド史『シャラフナーメ』でその系譜が詳しく述べられている[10]。それによると，16世紀末，アナトリア南東部のディヤルバクル地方とヴァン地方に拠点を持つクルド系有力家系は（表1　クルド系有力家系とクルド系諸県）に示す通りである。

このうち，1. チェミシュゲゼク，2. ミルダスィー，3. ズィルキー，5. スレイマニー，8. ジズレ，10. ヒザン，11. シルヴィーが，内部でさらに複数の家系に分岐している。

オスマン朝征服後，クルド系有力家系の家長であるアミールは，自らの支配領域を県知事として世襲的に管理することになった。この際，ほとんどのクルド系アミールの支配領域がそのまま1つの県となったが，いくつか例外が見られる。例えば，チェミシュゲゼクでは，16世紀中頃に権勢を誇ったアミールであり県知事でもあったピール・ヒュセイン・ベイが死去すると，チェミシュゲゼク県はチェミシュゲゼク，マズギルト，ペルテク，サクマンの4県に分割された[11]。マズギルト，ペルテク，サクマンの各県ではチェミシュゲゼク・アミールの家系出身者が県知事になっ

10）Šaraf Ḫān Bidlīsī, *Šaraf-nāma*.
11）チェミシュゲゼク分割については，Aydın 1998: 234–42; Ünal 1999: 35–51.

表 1.　クルド系有力家系とクルド系諸県

クルド系有力家系	クルド系諸県	県の型
1. チェミシュゲゼク Çemişgezek	○→×	
1-1. ペルテク Pertek	○	リヴァー
1-2. サクマン Ṣaḳmān	○	リヴァー
1-3. マズギルト Māzgird	○	リヴァー
2. ミルダスィー Mirdāsī		
2-1. エイル Eğīl	○	ヒュキューメト
2-2. パル Pālū	○	ヒュキューメト
2-3. チェルミク Çermīk	○	リヴァー
3. ズィルキー Zirḳī		
3-1. デルズィニー Derzīnī	○	リヴァー
3-2. ギルディカン Girdikān	○	リヴァー
3-3. アタク Atāḳ	○	リヴァー
3-4. テルジル Tercīl	○	リヴァー → ヒュキューメト
4. スヴェイディー Süveydī		
	4-1. チャパクチュル Çapāḳçūr	リヴァー
	4-2. ゲンジェ Gence	ヒュキューメト
	4-3. ハンジュク Ḫāncūḳ	リヴァー
5. スレイマニー Süleymānī		
5-1. クルプ Ḳulb	○	リヴァー
5-2. メファリキン Mefāriḳīn	＝ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン Besyān Būcyān Zīlān	リヴァー
6. ハッキャリ Ḥakkārī	○	ヒュキューメト
7. イマディエ ʻİmādīye	○	ヒュキューメト
8. ジズレ Cizre		
8-1. ジズレ Cizre	○	ヒュキューメト
8-2. グルギル Gūrgīl	○	リヴァー
9. ハゾ Ḥāzo	○	ヒュキューメト
10. ヒザン Ḥīzān		
10-1. ヒザン Ḥīzān	○	ヒュキューメト
10-2. ミュキュス Müküs	○	リヴァー
	10-2′ キャルキャル Kārkār	リヴァー
10-3. イスパイルト İsbāyird	○	リヴァー
11. シルヴィー Şīrvī（キュフラー Küfrā）	（シルヴィーの半分）	リヴァー
11-1. ケルニー Kernī	（シルヴィーの半分）	リヴァー
11-2. イルン Īrūn	×	
12. マフムーディー Maḥmūdī	○	ヒュキューメト
13. ビトリス Bitlīs	○	ヒュキューメト

たが，チェミシュゲゼク県ではアミールの家系出身ではない者が県知事に就任するようになり，オスマン朝の一般の県と同じになった。スヴェイディーではスヴェイディー・アミールの家系からチャパクチュル，ゲンジェ，ハンジュクという 3 県の知事が輩出された。ミュキュスではアミール一族の内紛の結果，ミュキュス県から分岐して，新たにキャルキャル県が創設された。シルヴィーでは元々複数のアミールの家系があるが，県として史料に現れるのはシルヴィー県のみであり，シルヴィー（キュフラー）・アミールが管轄した。しかし内紛によりシルヴィー県は二分され，それぞれ「シルヴィーの半分 nıṣf-ı Şīrvī の県」と呼ばれた[12)]。2 つのシルヴィー県の知事を輩出したのはシルヴィー（キュフラー）

12）『ディルリク発給簿』以外の史料では，2 つのシルヴィー県は区別されずに「シルヴィーの半分の県」（KK.d 218: 65; A.{DVNS.MHM.d 6: no.475），もしくは単に「シルヴィー県」（cf. MAD.d 563: 99; A.{DVNS.MHM.d 22: no.161; KK.d 262: 185）と記された。『ディルリク発給簿』での記述については（5–1　推定額のディルリク）を参照。

とケルニーのアミール一族である。

『シャラフナーメ』におけるアミールの呼称は「〜のアミール（またはハーキム）」という形式であり，アミールに冠せられた呼称は，「チェミシュゲゼクのアミール」「ビトリスのハーキム」というように，アミールが統率する部族・部族連合またはアミールの本拠地のいずれかに大別できる。アミールとハーキムの違いは，アミールの勢力の差によると考えられ，アミールの中でも特に権勢を誇った者がハーキムと呼ばれた。一方，オスマン朝の史料では一般に「〜のベイ（またはハーキム）」という形式であり，アミールという言葉は使用されず，専ら県知事という意味でベイもしくはハーキムが使われた。オスマン朝下でクルド系諸県の区別化もはかられ，16 世紀末から 17 世紀初頭にかけて，ベイが管理するリヴァーとハーキムが管理するヒュキューメトに大別されていった。

3　クルド系諸県におけるティマール制の実施状況

前述のように，クルド系諸県はリヴァー型とヒュキューメト型の 2 種類に大別されるが，この違いは原則としてティマール制の有無に拠る。つまりリヴァーではティマール制が実施され，ヒュキューメトではティマール制が実施されなかったと考えられている。ただしビトリス県については，ヒュキューメトでありながらティマール制が施行された特異な例として，これまで知られてきた。以上の通説は，はじめにで述べたように，17 世紀に執筆された『法令集』の記述に拠るところが大きく，クルド系諸県で実際にティマール制が実施されたか否かについて，これまで文書史料に依拠して広く検討されることはなかった。以上のような背景を踏まえて，本章ではクルド系諸県においてティマール制がどのように実施されたのか，主に『ディルリク発給簿』を通して検討する。

クルド系諸県でのディルリクについては，クルド系県知事とそれ以外のケースを切り離して考える必要がある。クルド系県知事には県知事用のディルリクが授与されることになっており，その際，県知事就任前に保有したディルリクは一族または配下の者に移譲される仕組みになっていたからである[13)]。本章ではクルド系県知事とその関係者のディルリク保有を（表 2　クルド系県知事のディルリク）と（表 3　クルド系県知事の関係者のディルリク）にまとめた。（表 2）（表 3）を作成するにあたっては，『ディルリク発給簿』から情報を取ったが，『ディルリク発給簿』に記載のないクルド系県知事およびその関係者については『ディルリク発給簿』以外の史料から情報を補った。また（表 3）を作成するにあたり，史料中クルド系県知事の一族または配下の者と明記されている人物のみ抽出した。ただしクルド系県知事の一族であっても配下の者と記されることが多く，実際に一族と配下の者を区別するのは困難であるため，（表 3）は「クルド系県知事の関係者」としてまとめた。

3-1　クルド系県知事のディルリク（表 2 参照）

一般に，県知事は所轄の県に自身のディルリクを保有した。以下では，クルド系県知事のディルリクについて，保有の有無やディルリク地を中心に見ていく。

・チェミシュゲゼク：マズギルト，ペルテク，サクマンの各県知事（表 2：1–24）

前述のように，16 世紀中頃，チェミシュゲゼク県はチェミシュゲゼク，マズギルト，ペルテク，サクマンの 4 県に分割された。マズギルト，ペルテク，サクマン諸県ではアミールの家系出身者が県知事になったが，チェミ

13）DFE.RZ.d 381: 691; KK.d 356: 104.

表 2　クルド系県知事のディルリク

［※パターン　1：ディルリク授与　2：スルタンの即位などによる勅許状の更新　3：ディルリク額の変更（加増や不足分の充当）　4：紛失などによる勅許状の再発行　5：ディルリクの確定や再確認　6：その他］

No.	クルド系諸県	クルド系県知事	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
1	Māzgird	Pīlten Beğ	Çemişgezek, Māzgird	225496		2	1561	DFE.RZ.d 14: 416–7
2	Māzgird	Pīlten Beğ	Çemişgezek, Māzgird	225467		2	1568	DFE.RZ.d 12: 874–6
3	Māzgird	ʿAlī Beğ	Çemişgezek, Māzgird	265497		3	1584	DFE.RZ.d 73: 369–72
4	Māzgird	Allāhverdi Beğ	Çemişgezek, Māzgird	265497		2	1621	DFE.RZ.d 412: 217
5	Māzgird	Ḥaydar Beğ	Çemişgezek, Māzgird	244776		1	1632	DFE.RZ.d 510: 58–60
6	Māzgird	Ḫālid Beğ	Çemişgezek, Māzgird	244776		1	1633	DFE.RZ.d 539: 494–6
7	Pertek	Rüstem Beğ	—	346887		—	1549	MAD.d 563: 151
8	Pertek	Rüstem Beğ	—	400000		—	1568	MAD.d 563: 151
9	Pertek	Bayṣunḳur Beğ	—	350000		—	1571	MAD.d 563: 151
10	Pertek	Bayṣunḳur Beğ	Çemişgezek, Pertek	380000		2, 3	1590	DFE.RZ.d 117: 778–81
11	Pertek	Bayṣunḳur Beğ	Çemişgezek, Pertek	380029		2, 3	1590	DFE.RZ.d 117: 789–92
12	Pertek	Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek, Pertek	381211		1	1611	DFE.RZ.d 326: 311–3
13	Pertek	Meḥmed Beğ	Çemişgezek, Pertek	326550		1	1622	DFE.RZ.d 412: 229–30
14	Pertek	Ferruḫṣād Beğ	Çemişgezek, Pertek	346887		1	1647	DFE.RZ.d 619: 386–7
15	Ṣaḳmān	Keyḫusrev Beğ	—	300000		—	1553	MAD.d 563: 150
16	Ṣaḳmān	Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	365000		3	1571	DFE.RZ.d 33: 270–2
17	Ṣaḳmān	Ṣāliḥ Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	385000		3	1590	DFE.RZ.d 118: 203–5
18	Ṣaḳmān	Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	381211		5	1590	DFE.RZ.d 118: 213–5
19	Ṣaḳmān	Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	381211		2, 3	1595	DFE.RZ.d 176: 112–5
20	Ṣaḳmān	Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	381211		4	1606	DFE.RZ.d 279: 367–9
21	Ṣaḳmān	Meḥmed Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	322625		1	1611	DFE.RZ.d 326: 308–9
22	Ṣaḳmān	ʿÖmer Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	275144		—	1624–25	DFE.RZ.d 437: 492
23	Ṣaḳmān	Maḥmūd Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	322625		1	1633	DFE.RZ.d 539: 453–6
24	Ṣaḳmān	Ḫālid Beğ	Çemişgezek, Māzgird, Ṣaḳmān	322625		1	1639	DFE.RZ.d 565: 461–2
25	Eğīl	Ḳāsım Beğ	Ḫarburt	127145		—	1518	TT.d 64: 662–8
26	Eğīl	Ca'fer Beğ	—	96750		2	1577	KK.d 262: 117
27	Eğīl	ʿOṣmān Beğ	Ḫarburt	96750		1	1591	DFE.RZ.d 125: 288–9
28	Eğīl	Caʿfer Beğ	Ḫarburt	96750		1	1591	DFE.RZ.d 125: 317–8
29	Eğīl	Caʿfer Beğ	Ḫarburt	96750		2	1596	DFE.RZ.d 176: 69–70
30	Eğīl	Ġażanfer Paşa	Ḫarburt	96750		1	1611	DFE.RZ.d 326: 331
31	Eğīl	Me'mūn Beğ	Ḫarburt	96750		2	1618	DFE.RZ.d 331: 130
32	Eğīl	Me'mūn Beğ	Ḫarburt	96750		2	1632	DFE.RZ.d 598: 323
33	Çermīk	Şāh ʿAlī Beğ	Çermīk	200995		—	1518	TT.d 64: 508–20
34	Çermīk	Bayındır Beğ	—	231092		—	1553	MAD.d 563: 83
35	Çermīk	Bayındır Beğ	Çermīk, Erġanī	211911		2	1556	DFE.RZ.d 7: 358–9
36	Çermīk	Bayındır Beğ	—	234000		—	1567/8	MAD.d 563: 83
37	Çermīk	Meḥmed Beğ	Çermīk	234000		1	1569	DFE.RZ.d 12: 913–4
38	Çermīk	ʿOṣmān Beğ	Çermīk	234000		2	1643	DFE.RZ.d 598, 303–4
39	Çermīk	Ẕülfiḳār Beğ	Çermīk	234000		1	1661	DFE.RZ.d 749: 148–9
40	Zirḳī (=Derzīnī)	Yaʿḳūb Beğ	Siʿird	8000		—	1560	A.{DVNS.MHM.d 4: no.371
41	Girdikān	Nāṣır Beğ	Sincār	—		3	1554	MAD.d 17642: 309
42	Girdikān	Mīr Ḫalīl Beğ	Girdikān	200000		1	1556	A.{DVNS.MHM.d 2: no.1347
43	Girdikān	Meḥmed Beğ	Girdikān	—		3	1575	A.{DVNS.HADR.d 1: 328
44	Aṭāḳ	Aḥmed Beğ	Āmid (Tercīl)	100350		—	1527-28	TT.d 134: 8
45	Aṭāḳ	Şāhīn Beğ	Atāḳ	200626		—	1540	TT.d 208: 101–2
46	Aṭāḳ	Yūsuf Beğ	—	220000		—	1549	A.{RSK.d 1452: 245
47	Atāḳ	Şāh Yūsuf Beğ	Atāḳ	300626		3	1556	DFE.RZ.d 7: 341–2
48	Aṭāḳ	Ḥasan Beğ	Atāḳ	250000		3	1558	DFE.RZ.d 14: 776–7
49	Aṭāḳ	Yūsuf Beğ	Aṭāḳ	300626		4	1562	DFE.RZ.d 14: 777–8
50	Aṭāḳ	Ḥasan Beğ	—	343119		—	1570	MAD.d 563: 82
51	Aṭāḳ	Ḥasan Beğ	—	400000		—	1573-74	MAD.d 563: 83
52	Atāḳ	Ḥasan Beğ	—	443119		2	1581	KK.d 262: 113
53	Atāḳ	Velī Beğ	Atāḳ	443119		1	1590	DFE.RZ.d 118: 458–60
54	Atāḳ	Cihānşāh Beğ	Atāḳ	434040		1	1591	DFE.RZ.d 125: 376–7
55	Atāḳ	Velī Beğ	Atāḳ	447380		2	1595	DFE.RZ.d 176: 18–9
56	Atāḳ	Aḥmed Beğ	Atāḳ	447380		1	1597	DFE.RZ.d 212: 548–9
57	Atāḳ	Seyyid Meḥmed Beğ	Atāḳ	400000		1	1611	DFE.RZ.d 326: 345–6
58	Atāḳ	Muṣṭafā Beğ	Atāḳ	400000		1	1616	DFE.RZ.d 352: 174
59	Atāḳ	ʿAlīcān Beğ	Atāḳ	400000		1	1626	DFE.RZ.d 448: 22
60	Atāḳ	ʿAlīcān Beğ	Atāḳ	400000		2	1643	DFE.RZ.d 598: 383
61	Atāḳ	Seyyid Maḥmūd Beğ	Atāḳ	400000		1	1645	DFE.RZ.d 608: 378–9
62	Tercīl	Şems Beğ	Tercīl	132723		—	1540	TT.d 208: 99
63	Tercīl	Maḥmūd Beğ	—	132723		1	1548-49	A.{RSK.d 1452: 247
64	Tercīl	Ḥaydar Beğ	—	270246		—	1552	MAD.d 563: 83
65	Tercīl	Ḥüseyin Beğ	Tercīl	275251		3	1591	DFE.RZ.d 125: 378–9
66	Tercīl	ʿÖmer Beğ	Tercīl	275251		1	1597	DFE.RZ.d 195: 20
67	Tercīl	İbrāhīm Beğ	Tercīl	465293		1	1612	DFE.RZ.d 365: 134–6

表 2 続き

No.	クルド系諸県	クルド系県知事	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
68	Tercīl	İbrāhīm Beğ	Tercīl	465293		5	1622	DFE.RZ.d 412: 245–6
69	Tercīl	Aḥmed Beğ	Tercīl	270251		2	1651	DFE.RZ.d 647: 120
70	Çapākçūr	Ḫālid Beğ	—	279358		—	1570	MAD.d 563: 86
71	Çapākçūr	ʻAlīcān Beğ	Çapākçūr	205000		1	1596	DFE.RZ.d 176: 115–6
72	Çapākçūr	İsmaʻil Beğ	Çapākçūr	251785		1	1608	DFE.RZ.d 290: 304
73	Çapākçūr	Emīrḥān	Çapākçūr	251785		1	1645	DFE.RZ.d 608: 359
74	Gence	Murād Beğ	—	250000		1	1561	A.{DVNS.MHM.d 4: no.2014
75	Gence	Murād Beğ	Gence, Ḫāncūḳ	260000	ber vech-i tekmīl[taḥmīn]	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1016
76	Gence	Murād Beğ	—	278347		—	1574–75	MAD.d 563: 88
77	Gence	Süleymān Beğ	Gence, Ḫāncūḳ	278347	ber vech-i taḥmīn	3	1586	DFE.RZ.d 86: 1195–8
78	Ḫāncūḳ	Meḥmed Beğ	Ḫāncūḳ	200000	ber vech-i taḥmīn	3	1561	DFE.RZ.d 14: 790–1
79	Ḫāncūḳ	Meḥmed Beğ	Gence, Ḫāncūḳ	224000	[ber vech-i taḥmīn]	3	1566	DFE.RZ.d 12: 863–4
80	Ḫāncūḳ	Meḥmed Beğ	Gence, Ḫāncūḳ	253100	[ber vech-i taḥmīn]	3	1571	DFE.RZ.d 36: 617–9
81	Ḫāncūḳ	Meḥmed Beğ	—	397999		2	1577	KK.d 262: 116
82	Besyān, Būcyān, Zīlān	Ḫālid Beğ	Ḳulb (Mefāriḳīn), Ḫarburt	200000		1	1568	DFE.RZ.d 12: 883
83	Besyān, Būcyān, Zīlān	Behlūl Beğ	Ḳulb (Mefāriḳīn), Sincār	195686		3	1572	DFE.RZ.d 36: 713–4
84	Besyān, Būcyān, Zīlān	Beşīr Beğ	Ḳulb (Mefāriḳīn), Ḫarburt	200000		1	1582	DFE.RZ.d 125: 373–4
85	Besyān, Būcyān, Zīlān	Manṣūr Beğ	Ḳulb (Mefāriḳīn), Ḫarburt	200000		1	1605	DFE.RZ.d 279: 325
86	Ḳulb	Şāh Veled Beğ	Āmid (Ḳulb)	114000		—	1518	TT.d 64: 184–9
87	Ḳulb	ʻAlīcān Beğ	Āmid, Ḳulb	75000		1, 3	1537	DFE.RZ.d 4: 2–3
88	Ḳulb	ʻAlīcān Beğ	—	166688		—	1567–68	MAD.d 563: 87/2
89	Ḳulb	Ḥüseyin Beğ	Ḳulb	166688		1	1572	DFE.RZ.d 34: 539–40
90	Ḳulb	Ḳılıç Beğ	Ḳulb	166688		1	1586	DFE.RZ.d 86: 957–8
91	Ḳulb	Zeynel Beğ	Ḳulb	166688		1	1586	DFE.RZ.d 86: 977–9
92	Ḳulb	Seydī Aḥmed Beğ	Ḳulb	200000		1	1590	DFE.RZ.d 118: 141–2
93	Ḳulb	Seyyid Aḥmed Beğ	Ḳulb	200000		1	1595	DFE.RZ.d 176: 9–10
94	Ḳulb	Zeynel Beğ	Ḳulb	166688		1	1596	DFE.RZ.d 176: 97–9
95	Ḳulb	İbrāhīm Beğ	Ḳulb	200000		1	1602	MAD.d 15402: 29–31
96	Ḳulb	Ḥaydar	Ḳulb	200000		1	1610	DFE.RZ.d 326: 166
97	Ḳulb	Ḥüseyin Beğ	Ḳulb	200000		1	1610	DFE.RZ.d 326: 23–4
98	Ḳulb	Meḥmed Beğ	Ḳulb	200000		1	1630	DFE.RZ.d 501: 116–7
99	Ḳulb	Zeynel Beğ	Ḳulb	166688		1	1645	DFE.RZ.d 608: 401–2
100	ʻİmādīye	Sulṭān Ḥüseyin Beğ	Moṣul	24688		3	1562	DFE.RZ.d 14: 1116
101	Gürgīl	Aḥmed Beğ	Sindī Süleymānī	100000		—	1563	KK.d 218: 72
102	Gürgīl	Mīr Aḥmed Beğ	—	100000		—	1567–68	MAD.d 563: 89
103	Gürgīl	Aḥmed Beğ	Sincār	100000		—	[1569]※	TT.d 991: 10
104	Ḥazo	Meḥmed Beğ Ṣāṣonī	Āmid	11500		—	1518	TT.d 64: 171
105	Ḥīzān	Sulṭān Aḥmed Beğ	Bitlīs	20162		1	1554	MAD.d 17642: 294
106	Kārkār	Ḥasan Beğ	Mūkūs, Kārkār	300000	ber vech-i taḥmīn	1	1556	DFE.RZ.d 7: 397–8
107	Kārkār	Rüstem Beğ	Mūkūs, Kārkār	300000	ber vech-i taḥmīn	1	1567	DFE.RZ.d 22:906–7
108	Kārkār	Ḥasan Beğ	Mūkūs, Kārkār	300000	ber vech-i taḥmīn	1	1594	DFE.RZ.d 169: 584
109	İsbāyird	Meḥmed Beğ	[İsbāyird]	31 (ḳarye)	[bilā-taʻyīn]	1	1559	TT.d 313: 360
110	İsbāyird	Eyyūb Beğ	İsbāyird	32 (ḳalʻe ve ḳurā)	bilā-taʻyīn	1	1573	DFE.RZ.d 36: 833
111	Şīrvī	Meḥmed Beğ	Bitlīs	27460		—	1540	TT.d 208: 17
112	Şīrvī	Ḥasan Beğ	—	200000	ber vech-i taḥmīn	—	1563	MAD.d 563: 99
113	Şīrvī	Ḥasan Beğ	Şīrvī	200000	ber vech-i taḥmīn	1	1568	DFE.RZ.d 12: 1032–3
114	Maḥmūdī	Ḥasan Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	170000		—	1559	TT.d 313: 317–8
115	Maḥmūdī	Ḥasan Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	186730		2	1572	DFE.RZ.d 36: 828
116	Maḥmūdī	Ḥasan Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān, Bitlīs	230000		2	1577	DFE.RZ.d 22: 31–2
117	Maḥmūdī	ʻİzzeddīn Şīr Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	210498		4	1586	DFE.RZ.d 86: 1180–1
118	Maḥmūdī	ʻİzzeddīn Şīr Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	230498		2	1595	DFE.RZ.d 176:121–2
119	Maḥmūdī	ʻİzzeddīn Şīr Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	340498		2, 3	1600	DFE.RZ.d 233: 323–4
120	Ḫoşāb	Aḥmed Maḥmūdī	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	200000		1	1611	DFE.RZ.d 326: 482–3
121	Maḥmūdī	ʻAbdullāh Beğ	Ḳulb, Rūhā, Tercīl, Vān	270471		1	1611	DFE.RZ.d 326: 347–8
122	Ḫoşāb	Zeynel	Tercīl, Vān, Bitlīs	200000		5	1619	DFE.RZ.d 381: 730–1
123	Bitlīs	Şeref Ḫān	—	605564		3	1579	KK.d 233: 177
124	Bitlīs	Şeref Ḫān	Bitlīs, Kesān, Mūş	1205372		3	1579	YB.04.d 203: 331–4; KK.d 236: 50
125	Bitlīs	Şeref Ḫān	Bitlīs, ʻĀdilcevāz, Vān, Mūş	1415372		3	1592	DFE.RZ.d 156: 397–400
126	Bitlīs	Şeref Ḫān	Bitlīs, ʻĀdilcevāz, Vān, Mūş	1415372		2, 3, 6	1595	DFE.RZ.d 176: 559–63
127	Bitlīs	Şemseddīn Ḫān	Bitlīs, ʻĀdilcevāz, Vān	1415372		1	1598	DFE.RZ.d 206: 261–4
128	Bitlīs	Şeref Ḫān	Bitlīs, ʻĀdilcevāz	1335372		1	1619	DFE.RZ.d 381: 680–1
129	Bitlīs	Abdāl	Bitlīs, ʻĀdilcevāz	1335372		1	1622	DFE.RZ.d 412: 375–7
130	Bitlīs	Abdāl Beğ	Bitlīs, ʻĀdilcevāz	1335372		2	1650	DFE.RZ.d 631: 698–70
131	Bitlīs	Ziyāʾeddīn	Bitlīs, ʻĀdilcevāz	1335372		2	1656	DFE.RZ.d 695: 295–7
132	Bitlīs	Şeref Ḫān	Bitlīs, ʻĀdilcevāz, Vān, Mūş	1415372		1	1676	DFE.RZ.d 852: 219–20
133	Bitlīs	Nūḥ Ḫān	Bitlīs	1415373		1	1692	DFE.RZ.d 968: 436–8

※ TT.d 991 の作成年は不明とされている。しかし同台帳のスィンジャル県のディルリク保有者リストには同県知事メリク・メフメト・ベイの名がある。メリク・メフメト・ベイは 1562 年と 1569 年に 2 度スィンジャル県知事に就任したが，その際のディルリクは 1562 年が 429372 アクチェ，1569 年が 431851 アクチェであった（MAD.d 563: 84, 88）。TT.d 991 にはメリク・アフメト・ベイのディルリク額が 431851 アクチェと記されていることから，TT.d 991 は 1569 年の状況を反映していると考える。

シュゲゼク県ではアミールの家系出身者ではない者が県知事に就任するようになり，オスマン朝の一般の県と同じになった。その一方で，チェミシュゲゼク県内のディルリクはマズギルト，ペルテク，サクマンの県知事やその関係者にも分配され続けた。このような状況が生じた理由として，ペルテク，サクマン，マズギルト諸県では税収が乏しく，分配可能なディルリクが限られていたことが考えられる。例えば，ディヤルバクル地方征服直後の 1518 年に作成された租税台帳によると，チェミシュゲゼク県で分配可能なディルリクが 130 万アクチェ以上であるにも関わらず，ペルテク（当時は郷）で分配可能なディルリクは約 10 万アクチェ，サクマン（当時は郷）では 10 万アクチェ，マズギルト（当時は郷）では約 20 万アクチェというように，チェミシュゲゼク県に比べるとかなり少額であったことがわかる[14)]。

個々の県知事のディルリクについて見てみると，マズギルト県知事のディルリク（表 2：1–6）はチェミシュゲゼク県とマズギルト県に，ペルテク県知事のディルリク（表 2：7–14）はチェミシュゲゼク県とペルテク県に，サクマン県知事のディルリク（表 2：15–24）はチェミシュゲゼク県，マズギルト県，サクマン県にあるように，3 県知事ともに所轄の県とチェミシュゲゼク県でディルリクを保有したことがわかる。

・ミルダスィー：エイル，パル，チェルミクの各県知事（表 2：25–39）

パル県知事のディルリク保有は史料で確認できない。エイル県知事（表 2：25–32）は，エイル県ではなく，ハルプト県でディルリクを保有した[15)]。エイル県とパル県はヒュキューメトである。ヒュキューメトではティマール制が施行されないという原則からすれば，両県知事のディルリクが所轄の県に存在しないのは当然であろう。チェルミク県知事（表 2：33–39）はチェルミク県にディルリクを保有した。

・ズィルキー：デルズィニー，ギルディカン，アタク，テルジルの各県知事（表 2：40–69）

アタク県知事（表 2：44–61）とテルジル県知事（表 2：62–69）は各々所轄の県でディルリクを保有した。デルズィニー県知事のディルリク（表 2：40）は 1 件だけ確認できるが，これは加増分のディルリクに関する情報であるため，ディルリクすべてについて知ることはできない。デルズィニー県知事の加増分のディルリクはスィイルト県にある。ギルディカン県知事のディルリクは 3 件確認できるが，1 件がスィンジャル県（表 2：41），2 件がギルディカン県（表 2：42–43）で保有した。17 世紀初頭にリヴァーからヒュキューメトとなったテルジル県では，ヒュキューメトとなった後もティマール制が継続したことがわかる[16)]。

・スヴェイディー：チャパクチュル，ゲンジェ，ハンジュクの各県知事（表 2：70–81）

チャパクチュル県知事（表 2：70–73）は所轄の県でディルリクを保有した。ゲンジェ県知事（表 2：74–77）とハンジュク県知事（表 2：78–81）のディルリクは両県に混在したが，いずれのディルリクも推定額で授与された。ヒュキューメトであるゲンジェ県でもティマール制が実施されたことが確認できる[17)]。

14）TT.d 64: 801–13, 831–42.
15）エイル県知事はオスマン朝によるディヤルバクル地方征服直後の 1518 年の時点ですでにハルプト県にディルリクを保有している（TT.d 64: 662–8）。
16）テルジル県のリヴァーからヒュキューメトへの移行については，齋藤 2006a: 59–60。
17）Göyünç 1994: 81–2 でもゲンジェ県でのティマール制施行が言及されている。

・スレイマニー：クルプ，ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン（＝メファリキン）の各県知事（表 2：82–99）

ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン県知事（表 2：82–85）は，クルプ県のほか，ハルプト県やスィンジャル県でディルリクを保有した。ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン県は，通常の県組織と違い，移動する遊牧集団を対象とする県であるため，明確な行政区域はない。そのため，ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン県知事のディルリクは，当初クルプ県に属するメファリキン郷などに設定された。その後，メファリキン郷がクルプ県から分離され，メファリキン県となると，ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン県知事がメファリキン県知事を兼ねるようになった[18)]。クルプ県知事（表 2：86–99）は所轄の県でディルリクを保有した。

・ハッキャリ：ハッキャリ県知事（表 2：なし）

ヒュキューメトを管轄するハッキャリ県知事のディルリク保有は史料で確認できない。

・イマディエ：イマディエ県知事（表 2：100）

ヒュキューメトを管轄するイマディエ県知事のディルリクは 1 件だけ確認できる。ディルリク地はイマディエ県ではなく，モスル県である。

・ジズレ：ジズレ，グルギルの各県知事（表 2：101–103）

ヒュキューメトを管轄するジズレ県知事のディルリク保有は確認できない。グルギル県知事のディルリクは 3 件確認できる。このうち 2 件（表 2：101，103）については，グルギル県ではなく，スィンディー・スレイマニー県とスィンジャル県である。もう 1 件（表 2：102）については，史料に記載がないためディルリク地が不明であるが，ほかの 2 件と保有者名およびディルリク額が同じで，保有年代も近いことから，スィンディー・スレイマニー県かスィンジャル県のいずれかであると考えられる。いずれにしても，リヴァー型の県であるにも拘らず，グルギル県知事のディルリクは所轄の県には存在しなかった。

・ハゾ：ハゾ県知事（表 2：104）

ヒュキューメトを管轄するハゾ県知事のディルリクは 1 件だけ確認できる。ディルリク地は，ハゾ県ではなく，アーミド県である。

・ヒザン：ヒザン，ミュキュス，イスパイルトの各県知事（表 2：105–110）

ヒュキューメトを管轄するヒザン県知事のディルリク（表 2：105）は 1 件だけ確認できる。ディルリク地は，ヒザン県ではなく，ビトリス県である。ミュキュス県知事のディルリクは史料で確認できない。ただしミュキュス県から分岐して創設されたキャルキャル県の知事のディルリク（表 2：106–108）がミュキュス県にあることから，ミュキュス県でもティマール制が施行されたことがわかる。ゲンジェとハンジュク両県知事のディルリクと同様に，キャルキャル県知事のディルリクも推定額で授与された。イスパイルト県知事（表 2：109–110）は所轄の県でディルリクを保有したが，ディルリク額は記載されていない。

・シルヴィー：シルヴィー県知事（表 2：111–113）

シルヴィー県知事のディルリクは 3 件確認できる。このうち 1 件（表 2：112）については史料に記載がないためディルリク地が不明であるが，（表 2：113）と保有者名，ディリルク額，保有条件が同じであることから，

18）例えば，ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン県知事ベフルル・ベイはメファリキン県知事でもあった（MAD.d 563: 88; DFE.RZ.d 36: 713–4; KK.d 225: 3; KK.d 89: 58）。ベスヤン，ブジュヤン，ズィランの各部族はスレイマニーの部族連合を形成した有力部族である。

シルヴィー県であると考えられる[19]。残りの2件（表2：111, 113）についてはビトリス県とシルヴィー県でディルリクを保有した。ただしビトリス県で保有したディルリクは，シルヴィー県知事のディルリクの一部である。ゲンジェ県知事，ハンジュク県知事，キャルキャル県知事のディルリクと同様に，シルヴィー県知事のディルリクも推定額で授与された。

・マフムーディー：マフムーディー県知事（表2：114–122）

ヒュキューメトを管轄するマフムーディー県知事のディルリクはクルプ，ルハー，テルジル，ヴァン，ビトリス諸県に点在したが，マフムーディー県では確認できない。

・ビトリス：ビトリス県知事（表2：123–133）

ビトリス県知事のディルリクはビトリス県をはじめ，アディルジェヴァズ，ヴァン，ムシュ諸県に点在した。ビトリス県はヒュキューメトであるにも拘らず，ティマール制が施行された。これは，16世紀中頃にビトリス県知事シェムセッティン・ベイ Şemseddīn Beğ がサファヴィー朝に亡命した後にティマール制が導入され，シェムセッティン・ベイの息子がオスマン朝に帰還した後もティマール制が継続したことに起因する。

以上から，クルド系県知事のディルリクのうち，ディルリク保有が確認できないのがパル，ハッキャリ，ジズレ，ミュキュスの各県知事である。このうち，パル，ハッキャリ，ジズレがヒュキューメト型の県である。所轄の県以外でディルリクを保有したのがエイル，デルズィニー，イマディエ，グルギル，ハゾ，ヒザン，マフムーディーの各県知事である。このうち，デルズィニーとグルギル以外はヒュキューメト型の県である。所轄の県でディルリクを保有したのがペルテク，サクマン，マズギルト，チェルミク，ギルディカン，アタク，テルジル，チャパクチュル，ゲンジェ，ハンジュク，クルプ，イスパイルト，シルヴィー，ビトリスの各県知事である。このうち，テルジル，ゲンジェ，ビトリスがヒュキューメト型の県である。

以上を整理すると，クルド系県知事も，オスマン朝の一般の県知事のように，基本的に所轄の県でディルリクを保有した。しかしヒュキューメト型の県を管轄したクルド系県知事については，ディルリク保有が確認できないケースや，所轄の県以外でディルリクを保有するケースが多く見られた。ヒュキューメトではティマール制が施行されないという原則からすれば，これは当然のことといえる。ただしヒュキューメトであるテルジル，ゲンジェ，ビトリス諸県ではディルリクが見られ，ティマール制が実施されていたことが確認できた。

3-2　クルド系県知事の関係者のディルリク（表3参照）

以下では，クルド系県知事の関係者のディルリクについて，保有の有無やディルリク地を中心に見ていく。

・チェミシュゲゼク：マズギルト，ペルテク，サクマン県知事の関係者（表3：1–85）

マズギルト，ペルテク，サクマンの各県知事に限らず，それぞれの県知事の関係者の多くもチェミシュゲゼク県でディルリクを保有した。この理由として考えられるのは，繰り返しになるが，マズギルト，ペルテク，サクマン諸県で税収が乏しく，分配可能なディルリクが限られていたことがあげられる。

19）（表2：112）と（表2：113）のハサン・ベイは，「シルヴィーの半分の県」を管轄したケルニー・アミールである。

表 3 クルド系県知事の関係者のディルリク

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
1	Pertek	Bayṣunḳur veled-i Rüstem Beğ	Çemişgezek	20000	Pīr Ḥüseyin Beğ el-müteveffâ		1	1554	MAD.d 17642: 347
2	Pertek	Meḥmed veled-i Rüstem Beğ (1)	Çemişgezek	10000	Pīr Ḥüseyin Beğ el-müteveffâ		1	1554	MAD.d 17642: 349
3	Pertek	Allâhverdi veled-i Ḥâcī	Çemişgezek	3300	Bayṣunḳur		1	1554	MAD.d 17642: 352
4	Pertek	Çelebi Ketḫudā	Çemişgezek	5511	Bayṣunḳur		1	1554	MAD.d 17642: 352
5	Çemişgezek	Keykāvüs veled-i Pīr Ḥüseyin Beğ	Çemişgezek (Şaḳmān)	22500			3	1555	DFE.RZ.d 7: 284
6	Şaḳmān	Avşār Ketḫudā-i Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek	4092	Meḥmed el-müteveffā; Yūsuf		1	1561	MAD.d 17983: 25
7	Pertek	Meḥmed veled-i Rüstem Beğ (2)	Çemişgezek	20000	Meḥmed veled-i Muṣṭafā Beğ		1	1561	DFE.RZ.d 14: 397
8	Pertek	ʻAlī veled-i Rüstem Beğ (1)	Çemişgezek	20039			1	1561	DFE.RZ.d 14: 397
9	Şaḳmān	Ṣāliḥ veled-i Keyḫusrev Beğ	Māzgird	7900	Manṣūr Beğ, mīr-i livā-i Vādī Ḳotūr		1	1562	DFE.RZ.d 14: 418; MAD.d 17983: 32
10	Çemişgezek	Sührāb (1)	Çemişgezek	7000	Bayram		1	1562	DFE.RZ.d 14: 404
11	Māzgird	ʻAlī veled-i Pilten Beğ (1)	Māzgird	1169	ʻAlī Beğ [mīr-i livā-i Māzgird]		1	1562	DFE.RZ.d 14: 419
12	Māzgird	ʻAlī veled-i Pilten Beğ (2)	Çemişgezek (Māzgird)	5066	ʻAlī Beğ [mīr-i livā-i Māzgird]		1	1564	MAD.d 17983: 35
13	Çemişgezek	Ḫalīl veled-i Pīr Ḥüseyin Beğ	Māzgird	20000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 865
14	Çemişgezek	İbrāhīm veled-i Muḥsin	Çemişgezek	20000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 865
15	Pertek	ʻAlī b. Rüstem Beğ (2)	Çemişgezek (Pertek)	20039			2	1568	DFE.RZ.d 12: 868
16	Çemişgezek	Gulābī veled-i Pīr Ḥüseyin Beğ	Çemişgezek	40019			2	1568	DFE.RZ.d 12: 869
17	Çemişgezek	Bayṣunḳur b. Pīr Ḥüseyin Beğ	Pertek	20000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 870
18	Çemişgezek	Mesīḥ ve Zāhid ve İslām veledān-ı Ḳubād Beğ (1)	Çemişgezek	14368	peder-i īş[ān]		1	1568	DFE.RZ.d 12: 882
19	Māzgird	Ḥüseyin veled-i Ferruḫşād Beğ (1)	Māzgird	16721			2	1568	DFE.RZ.d 12: 944
20	Māzgird	ʻAlī veled-i Pilten Beğ (2)	Māzgird	5066			2	1568	DFE.RZ.d 12: 945
21	Pertek	Meḥmed veled-i Rüstem Beğ (3)	Pertek	22674			6	1568	DFE.RZ.d 12: 950
22	Çemişgezek	Sührāb (2)	Çemişgezek	7000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 951
23	Pertek	Mürsel veled-i Bayṣunḳur Beğ	Çemişgezek	20000	ʻAlī		1	1572	DFE.RZ.d 36: 559
24	Pertek	Mīrzâl veled-i ʻAlī b. Rüstem Beğ	Çemişgezek (Pertek)	20039	ʻAlī		1	1572	DFE.RZ.d 36: 558
25	Pertek	Allâhverdi veled-i Bayṣunḳur Beğ (1)	Pertek	10000	Ferruḫşād birādereş		1	1572	DFE.RZ.d 36: 562
26	Çemişgezek	Meḥmed veled-i Behlûl	Çemişgezek	40021	pedereş el-fāriġ		1	1578	DFE.RZ.d 55: 457
27	Çemişgezek	Muḥib veled-i Caʻfer	Çemişgezek	20000	Caʻfer pedereş el-müteveffâ		1	1579	DFE.RZ.d 55: 463
28	Pertek	Allâhverdi veled-i Bayṣunḳur Beğ (2)	Çemişgezek, Pertek	20000	Sührāb		3	1579	DFE.RZ.d 62: 790
29	Māzgird	ʻOṣmān veled-i Pilten Beğ	Çemişgezek	11000	ʻAlī Beğ, mīr-i livā-i Māzgird		1	1580	DFE.RZ.d 55: 456
30	Çemişgezek	Meḥmed veled-i Nevrūz (1)	Çemişgezek	3000	Nevrūz pedereş		1	1581	DFE.RZ.d 55: 460
31	Çemişgezek	Abdāl veled-i Nevrūz	Çemişgezek	5000	Nevrūz pedereş		1	1581	DFE.RZ.d 55: 461
32	Çemişgezek	ʻAlī veled-i Nevrūz	Çemişgezek	7081	Nevrūz pedereş		1	1581	DFE.RZ.d 55: 462
33	Çemişgezek	Bābūr [b. Yaʻḳūb Beğ]	Çemişgezek	20000	[Yaʻḳūb Beğ]		1	1581	DFE.RZ.d 62: 625–6
34	Çemişgezek	Ḥüseyin ve Mesīḥ ve İslām (2)	Çemişgezek	30000	Zāhid birāder-i ḥodeşān el-müteveffâ		1	1581	DFE.RZ.d 65: 627
35	Çemişgezek	Manṣūr [b. Keykāvūs] (1)	Şaḳmān	22500	Keykāvūs pedereş el-fāriġ		1	1581	DFE.RZ.d 65: 629
36	Çemişgezek	Meḥmed b. Gulābī Beğ (1)	Çemişgezek	40019			1	1582	DFE.RZ.d 65: 628, 706–7
37	Çemişgezek	Ḫalīl ve İsmaʻīl veledān-ı İbrāhīm (1)	Çemişgezek	20000	Peder-i īşān el-müteveffâ		1	1582	DFE.RZ.d 62: 624–5
38	Şaḳmān	Meḥmed [birāder-i Keyḫusrev Beğ?]	Çemişgezek	3000		ber vech-i taḥmīn; ḥālī ve ḥarābe ḥāric ez defter	1	1583	DFE.RZ.d 73: 367
39	Māzgird	Bālī ve Aṣl veledān-ı Ẕülfiḳār	Çemişgezek	10000	Ẕülfiḳār peder-i īşān el-müteveffâ		1	1583	DFE.RZ.d 73: 366
40	Çemişgezek	Ḳaraḫān ve İṣfahān veledān-ı Bābūr (1)	Çemişgezek	20000	Bābūr veled-i Yaʻḳūb Beğ el-müteveffâ		1	1584	DFE.RZ.d 73: 366–7
41	Māzgird	Ḥaydar [b. ʻAlī]	Çemişgezek	20000			6	1584	DFE.RZ.d 73: 372–3
42	Çemişgezek	Meḥmed [b. Gulābī Beğ] (2)	Çemişgezek	40019			6	1584	DFE.RZ.d 73: 374
43	Māzgird	Meḥmed veled-i Ẕülfiḳār (1)	Çemişgezek	10000	Ẕülfiḳār pedereş		1	1586	DFE.RZ.d 86: 642
44	Çemişgezek	Ḳaraḫān ve İṣfahān veledān-ı Bābūr (2)	Çemişgezek	20000	Bābūr veled-i Yaʻḳūb Beğ el-müteveffâ		4	1586	DFE.RZ.d 86: 657

表 3　続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
45	Şaḳmān	Keyḫusrev b. Ṣāliḥ Beğ	Çemişgezek	10000	Ḳāsım		1	1588	DFE.RZ.d 118: 136
46	Şaḳmān	Maḥmūd birāder-i Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek	20000	ʿÖmer el-müteveffā		1	1590	DFE.RZ.d 118: 217
47	Māzgird	Ḥamza	Çemişgezek	6000	Ḥaydar b. ʿAlī Beğ el-müteveffā		1	1590	DFE.RZ.d 118: 127
48	Çemişgezek	Karaḫān ve İṣfahān veledān-ı Bābūr (3)	Çemişgezek	20000	Keyḫusrev Beğ el-fāriġ		1	1590	DFE.RZ.d 118: 218
49	Şaḳmān	Meḥmed birāder-i Keyḫusrev Beğ	Çemişgezek	11386	ʿÖmer el-müteveffā		1	1590	DFE.RZ.d 118: 219
50	Pertek	Ḥasan veled-i Bayṣunḳur Beğ	Çemişgezek	20000	Bayṣunḳur Beğ pedereş		1	1596	DFE.RZ.d 176: 85–6
51	Çemişgezek	Elvān ve Oruç ve Aḥmed veledān-ı Meḥmed	Çemişgezek	40021			2	1596	DFE.RZ.d 176: 91–2
52	Māzgird	Ḥüseyin veled-i Ferruḫşād Beğ (2)	Çemişgezek	16721			2	1596	DFE.RZ.d 176: 92
53	Şaḳmān	Meḥmed	Saḳmān	11386			2	1596	DFE.RZ.d 176: 101 2
54	Çemişgezek	Muṣṭafā veled-i Mīrzā Meḥmed	Çemişgezek	20000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 103
55	Şaḳmān	Maḥmūd [birāder-i Keyḫusrev Beğ?]	Çemişgezek	20000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 107
56	Çemişgezek	Manṣūr [b. Keykāvūs] (2)	Şaḳmān	22500			2	1596	DFE.RZ.d 176: 107–8
57	Çemişgezek	Karaḫān ve İṣfahān veledān-ı Bābūr (4)	Çemişgezek	20000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 184
58	Çemişgezek	Ḫalīl ve İsmaʿīl veledān-ı İbrāhīm (2)	Çemişgezek	20000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 185
59	Māzgird	Meḥmed veled-i Ẕülfiḳār (2)	Çemişgezek	10000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 200
60	Māzgird	Cihāngīr veled-i Pīlten Beğ	Çemişgezek	20000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 200
61	Çemişgezek	Meḥmed veled-i Pīr Ḥüseyin Beğ	Çemişgezek	12000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 199
62	Çemişgezek	Meḥmed veled-i Nevrūz (2)	Çemişgezek	3000			2	1596	DFE.RZ.d 176: 104
63	Pertek	Yūsuf veled-i Bayṣunḳur Beğ	Pertek	53000	pedereş el-müteveffā		1	1605	DFE.RZ.d 290: 278–9
64	Çemişgezek	İsmaʿīl [birāder-i Muḥsin Beğ]	Çemişgezek	20000	Muḥsin Beğ		1	1608	KK.d 354: 245
65	Çemişgezek	Ḥüseyin [b. Timurṭaş]	Çemişgezek	8000	Timurṭaş		1	1608	KK.d 354: 273
66	Pertek	Abdāl [b. Mīrzāl] (1)	Çemişgezek	8400	Yūsuf mīr-i livā-i Pertek		1	1610	KK.d 356: 63
67	Çemişgezek	Ebū Bekir [b. Yūsuf]	Māzgird	10000	Yūsuf mīr-i livā-i Pertek		1	1610	KK.d 356: 104
68	Çemişgezek	Ḥüseyin b. Ferruḫşād Beğ (3)	Çemişgezek	20021			1	1610	DFE.RZ.d 326: 284–5
69	Şaḳmān	Ḫālid b. Ṣāliḥ Beğ	Şaḳmān	10000	Ḥasan		1	1610	DFE.RZ.d 326: 290
70	Çemişgezek	Ẕülfiḳār ve Karamān veledān-ı Abdāl (1)	Çemişgezek	8000	Abdāl Mīr Meḥmed peder-i iṣān el-müteveffā		1	1611	DFE.RZ.d 326: 271
71	Māzgird	Maḥmūd b. Ḫalīl (1)	Māzgird	20000			4	1611	DFE.RZ.d 326: 291
72	Çemişgezek	İbrāhīm	Çemişgezek (Māzgird)	13000	Ebū Bekir [b. Yūsuf Beğ]		1	1611	DFE.RZ.d 326: 316–7
73	Çemişgezek	Karaḫān ve İṣfahān veledān-ı Bābūr (5)	Çemişgezek	20000			4	1611	DFE.RZ.d 326: 318
74	Çemişgezek	Oruç veled-i Meḥmed	Çemişgezek	19356			1	1611	DFE.RZ.d 326: 332
75	Çemişgezek	Timurṭaş b. Muṣṭafā	Çemişgezek	20000	Muṣṭafā pedereş el-müteveffā		1	1611	DFE.RZ.d 326: 334
76	Şaḳmān	Maḥmūd [birāder-i Keyḫusrev Beğ?]	Çemişgezek	41249	Aḥmed ve Meḥmed		3	1611	DFE.RZ.d 326: 337–8
77	Pertek	Ḫalīl b. İbrāhīm (3)	Çemişgezek	31000			5	1612	DFE.RZ.d 326: 315–6
78	Şaḳmān	ʿÖmer veled-i Keyḫusrev (1)	Çemişgezek	20000	ʿAbdullaṭīf el-müteveffā		1	1613	DFE.RZ.d 346: 425
79	Pertek	Ḫalīl b. İbrāhīm (4)	Pertek	40000	Eyne veled-i Muḥib		3	1615	DFE.RZ.d 352: 197
80	Çemişgezek	Ẕülfiḳār veled-i Abdāl Meḥmed (2)	Māzgird	8000	birādereş el-fāriġ		3	1616	DFE.RZ.d 352: 176
81	Māzgird	Maḥmūd b. Ḫalīl (2)	Māzgird	20000			5	1618	DFE.RZ.d 331: 415
82	Pertek	Abdāl veled-i Mīrzāl (2)	Çemişgezek (Pertek)	20039			2	1618	DFE.RZ.d 331: 421
83	Şaḳmān	ʿÖmer veled-i Keyḫusrev (2)	Çemişgezek (Şaḳmān)	41249			3	1618	DFE.RZ.d 331: 422
84	Pertek	Velī	Çemişgezek (Pertek)	20039	ʿAlī birādereş el-fāriġ		1	1634	DFE.RZ.d 565: 86
85	Şaḳmān	Muṣṭafā Beğ	Çemişgezek	50000	ʿOṣmān		1	1639	DFE.RZ.d 571: 388
86	Eğīl	Mīr Ḳāsım [b. Murād Beğ]	Ḫarburt	28844	Murād Beğ		1	1550	KK.d 209: 145
87	Eğīl	Aḥmed veled-i Diyādīn	Ḳulb	8270	Kılıç veled-i Ḥüseyin Beğ	[ber vech-i taḥmīn; ḥālī ve ḫarâbe ḫāric ez defter]	3	1586	DFE.RZ.d 86: 954–5
88	Pālū	Timurṭaş Beğ veled-i Cemşīd Beğ	Ḫarburt	40000	Şāh ʿAlī; Ġāziḳıran Sinān Beğ		1	1539	DFE.RZ.d 4: 37
89	Pālū	Ḥasan Ketḫudā	Ḫarburt	13500	Dāvūd Beğ		3	1556	DFE.RZ.d 7: 286

表 3 続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
90	Pālū	Yūsuf veled-i Dūlşāh	Ḫarburt	20000	pedereş el-müteveffā		1	1561	DFE.RZ.d 14: 756
91	Pālū	Ẕülfiḳār veled-i Dūlşāh	Ḫarburt	20000	pedereş el-müteveffā		1	1561	DFE.RZ.d 14: 757
92	Pālū	Maḥmūd b. Şāh Ḳubād	Ḫarburt	4000	Şāh Ḳubād pedereş el-müteveffā		1	1572	DFE.RZ.d 36: 710
93	Pālū	Süleymān ve Allāhverdi veledān-ı Şāh Ḳubād	Ḫarburt	6300	Şāh Ḳubād pedereş el-müteveffā		1	1572	DFE.RZ.d 36: 711
94	Pālū	Aşlı b. Timurṭaş	Ḫarburt	30409			1	1581	DFE.RZ.d 73: 187
95	Çermīk	Pīr ʻAlī Beğ birāder-i Şāh ʻAlī Beğ	Çermīk	19301			—	1518	TT.d 64: 521–3
96	Çermīk	Laṭīf	Çermīk	13354			—	1518	TT.d 64: 524–5
97	Çermīk	Şāh Ḥüseyin	Çermīk	14479			—	1518	TT.d 64: 526–7
98	Çermīk	Yār ʻAlī Beğ	Çermīk	14513			—	1518	TT.d 64: 528–9
99	Çermīk	Şāh Veled veled-i İsfendiyār Beğ	Çermīk	20000			1	1556	DFE.RZ.d 7: 360
100	Çermīk	ʻOṣmān Beğ b. ʻÖmer Beğ	Çermīk	23400			2	1643	DFE.RZ.d 598: 303–4
101	Girdikān	[Mīr Ḫalīl Beğ'in] oğlu	Girdikān	25000			1	1556	A.{DVNS.MHM.d 2: no.1347
102	Girdikān	[Mīr Ḫalīl Beğ'in] ʼammūsu oğlu	Girdikān	15000			1	1556	A.{DVNS.MHM.d 2: no.1347
103	Girdikān	Nāṣır b. Meḥmed Beğ	Siʻird	20000	Süleymān Çavuş		1	1584	DFE.RZ.d 86: 1167
104	Girdikān	Ebū Bekir birāder-i Nāṣır Beğ	Siʻird	20000	Nāṣır Beğ		1	1588	DFE.RZ.d 101: 986
105	Atāḳ	Yūsuf [b. Şāhīn]	Atāḳ	100000			—	1540	TT.d 208: 103
106	Atāḳ	Seydī Meḥmed	Atāḳ	16000	Yūsuf Beğ, mīr-i livā		1	1557	MAD.d 17983: 21
107	Atāḳ	Keyvān	Çapāḳçūr	3000	Şāhverdi b. ʻAlī		1	1585	DFE.RZ.d 85: 1162
108	Tercīl	ʻAlī Beğ veled-i Būdāḳ Beğ	Āmid (Tercīl)	25500			—	1527 28	TT.d 134: 10
109	Tercīl	Şeref Beğ veled-i Aḥmed Beğ	Āmid (Tercīl)	24000			—	1527–28	TT.d 134: 10
110	Tercīl	Şāhīn Beğ	Āmid (Tercīl)	24000			—	1527 28	TT.d 134: 10
111	Tercīl	Maḥmūd b. Şeref	Āmid (Tercīl)	6500			—	1527–28	TT.d 134: 10
112	Tercīl	Aḥmed	Çapāḳçūr	4000	İsmaʻīl b. Beşe Ḥüseyin		1	1582	DFE.RZ.d 85: 1161
113	Tercīl	Muṣṭafā b. Ḥaydar Beğ	Tercīl	16381	Maḥmūdī Ḥasan Beğ		3	1583	DFE.RZ.d 73: 356
114	Tercīl	ʻÖmer b. Ḥaydar Beğ (1)	Tercīl	23000	Seyyid Ḥüseyin el-fāriġ; Būdāḳ Beğ mīr-i livā-i Tercīl birādereş el-fāriġ		3	1583	DFE.RZ.d 73: 357
115	Tercīl	ʻÖmer b. Ḥaydar Beğ (2)	Tercīl	24000	Pīrī b. ʻAbbās el-müteveffā		3	1594	DFE.RZ.d 176: 13–4
116	Tercīl	Muṣṭafā b. Ḥaydar Beğ	Tercīl	23581			2	1610	DFE.RZ.d 326: 359
117	Tercīl	Ḳaraḥān veled-i Ḥüseyin	Ḳulb	2000	Ḥüseyin pedereş el-müteveffā		1	1617	DFE.RZ.d 322: 291
118	Süveydī	Maḳṣūd veled-i Işfahān Beğ	Çapāḳçūr	20200	Nūr ʻAlī		1	1554	MAD.d 17642: 287
119	Süveydī	Abdāl veled-i İşfahān Beğ	Çapāḳçūr	12000	ʻAlī		1	1554	MAD.d 17642: 287
120	Süveydī	Ferruḫşād veled-i Işfahān Beğ (1)	Çapāḳçūr	11660			1	1554	MAD.d 17642: 288
121	Çapāḳçūr	İspahān veled-i Maḳṣūd Beğ	Çapāḳçūr	10000	Bāyezīd b. Uğurlu el-müteveffā		1	1561	DFE.RZ.d 14: 802
122	Süveydī	Ferruḫşād veled-i Işfahān Beğ (2)	Çapāḳçūr	11660	Ferhād Çavuş		1	1561	DFE.RZ.d 14: 802
123	Süveydī	Ferruḫşād veled-i Işfahān Beğ (3)	Çapāḳçūr	11660			2	1568	DFE.RZ.d 12: 868
124	Süveydī	Velīcān veled-i Ḫālid Beğ	Çapāḳçūr	19288	Cān Ḳara Ceribaşı el-müteveffā		1	1572	DFE.RZ.d 36: 732
125	Süveydī	Ḳaracān ve Aḥmed veledān-ı Yūsuf Ağa	Çapāḳçūr	6000	Yūsuf Ağa		1	1572	DFE.RZ.d 36: 733
126	Süveydī	Şeygeldi? b. Manṣūr	Çapāḳçūr	3000		ber vech-i taḥmīn	1	1584	DFE.RZ.d 73: 334
127	Çapāḳçūr	Nebī	Çapāḳçūr	6000	Ḳubād veled-i Şemseddīn el-müteveffā		1	1616	DFE.RZ.d 352: 191
128	Çapāḳçūr	Maḥmūd veled-i Emīrḥān	Çapāḳçūr	20000	Emīrḥān pedereş		1	1645	DFE.RZ.d 608: 363
129	Çapāḳçūr	Nebī	Tercīl	6000	Ferruḫ el-müteveffā		1	1656	DFE.RZ.d 690: 301
130	Gence	Uluğ Beğ ʼammūzāde-i Sulṭān Aḥmed Beğ	Gence	20000		ber vech-i taḥmīn	4	1554	MAD.d 17642: 339
131	Süveydī	Meḥmed b. Sulṭān Aḥmed Beğ	Gence	40000		ber vech-i taḥmīn	—	1555	KK.d 213: 98
132	Gence	Uluḫān veled-i Murād Beğ	Gence	10000	Ḫālid el-müteveffā		—	1563	MAD.d 17983: 34
133	Gence	Muṣṭafā veled-i Murād Beğ	Gence	6000	müteveffā Sinān	[ber vech-i taḥmīn]	1	1565	DFE.RZ.d 12: 1014
134	Süveydī	Oruç	Gence	10054		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1008
135	Süveydī	Şāh Yūsuf	Gence	3000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 1008

表 3　続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
136	Süveydī	Yādigār	Gence	3347			2	1568	DFE.RZ.d 12: 1009
137	Süveydī	Ferruḫşād	Gence	6500			2	1568	DFE.RZ.d 12: 1009
138	Süveydī	Ḳulu	Gence	4200		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1010
139	Süveydī	Zeynel	Gence	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1010
140	Süveydī	Emīr	Gence	3000			2	1568	DFE.RZ.d 12: 1010
141	Süveydī	Şāhverdi b. Şüleymān?	Gence	5500		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1011
142	Süveydī	Yūsuf b. Ya‘ḳūb	Gence	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1011
143	Süveydī	Şeygeldi? b. Ġāzī	Gence	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1011
144	Süveydī	Ebū Bekir	Gence	4000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1012
145	Süveydī	Yūsuf ve ‘Ömer veledān-ı ‘Alī	Gence	4000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1012
146	Süveydī	Ḥūdāverdi b. Pīrī	Gence	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1012
147	Süveydī	Şeyḫīcān	Gence	15400		ber vech-i taḥmīn	3	1568	DFE.RZ.d 12: 1013
148	Süveydī	Ḳaymaz ve Murād veledān-ı Ẓāhir	Gence	4000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1013-4
149	Süveydī	Allāhverdi b. ‘Ömer Ağa	Gence	5000	‘Ömer Ağa	[ber vech-i taḥmīn]	1	1568	DFE.RZ.d 12: 1015
150	Süveydī	Ḫālid veled-i Yār Aḥmed	Gence	2000	Yār Aḥmed	ber vech-i taḥmīn	1	1568	DFE.RZ.d 12: 1015
151	Süveydī	‘Ömer Ağa	Gence	15000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1017
152	Süveydī	Şemseddīn	Gence	5000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1017
153	Süveydī	Dervīş	Gence	5999		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1017
154	Süveydī	Pīrī	Gence	8000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1018
155	Süveydī	Ḳādirḳulu veled-i Aḥmed	Gence	6000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1018
156	Süveydī	Süleymān veled-i Murād Beğ	Gence	22000		ber vech-i taḥmīn	3	1568	DFE.RZ.d 12: 1019
157	Süveydī	‘Abdurraḥman veled Pīrḳulu	Gence	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1019
158	Süveydī	‘Alī b. Sulṭān Aḥmed Beğ	Gence	10000		ber vech-i taḥmīn	1	1579	TT.d 617: 43
159	Süveydī	Şükür ve Ẕülfiḳār veledān-ı Uğurlu	Gence	6000	Uğurlu b. Uluğ Beğ el-müteveffā	ber vech-i taḥmīn	1	1579	DFE.RZ.d 55: 1071-2
160	Süveydī	Cān ‘Alī veled-i Sūvār	Ḫāncūk	2000		ber vech-i taḥmīn	2	1568	DFE.RZ.d 12: 1018
161	Süveydī	‘Oşmān ve Bāyezīd ve Mīrzā veledān-ı Būdāḳ	Ḫāncūk	12500	peder-i işān el-müteveffā	ber vech-i taḥmīn	1	1592	DFE.RZ.d 156: 251–2
162	Süveydī	Ḫālid ve İbrāhīm veledān-i Ḥasan	Ḫāncūk	7200	Hasan peder-i işān el-müteveffā	ber vech-i taḥmīn	1	1611	DFE.RZ.d 326: 22
163	Ḳulb	Sūsen veled-i Ḫalīl (1)	Ḳulb	7000	pedereş		1	1556	DFE.RZ.d 7: 317–8
164	Ḳulb	Sūsen veled-i Ḫalīl (2)	Ḳulb	7000			4	1556	DFE.RZ.d 7: 354
165	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	‘Alīcān veled-i Behlūl (1)	Ḳulb	5000	müteveffā ‘Ömerşāh		1	1571	DFE.RZ.d 33: 855–6
166	Ḳulb	Velīcān b. ‘Alīcān Beğ (1)	Ḳulb	20000	Ḥüseyin Beğ		2	1572	DFE.RZ.d 34: 541
167	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	‘Ömerşāh veled-i Behlūl Beğ (1)	Ḳulb	5000	‘Alīcān Beğ birādereş		1	1572	DFE.RZ.d 36: 714–6
168	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	‘Alīcān veled-i Behlūl Beğ (2)	Ḳulb	7000	Behlūl Beğ pedereş		1	1572	DFE.RZ.d 36: 716–7
169	Ḳulb	Ḳılıç b. Ḥüseyin Beğ	Ḳulb	10000	Būdāḳ b. Ḫālid		1	1575 1583	DFE.RZ.d 86: 932
170	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	‘Ömerşāh veled-i Behlūl Beğ (2)	Ḳulb	10000	müteveffā Ṭūr ‘Alī		3	1578	YB.04.d 203: 364–5
171	Ḳulb	Velīcān b. ‘Alīcān Beğ (2)	Ḳulb	20000			5	1585	DFE.RZ.d 86: 935–6
172	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	Maḥmūd veled-i Behlūl Beğ (1)	Ḳulb	13000	ḳarındaşı ‘Ömerşāh		3	1590	DFE.RZ.d 118: 159–60
173	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	‘Ömerşāh veled-i Behlūl Beğ (3)	Ḳulb	23800	‘Alīcān veled-i Behlūl Beğ		3	1590	DFE.RZ.d 118: 167–9
174	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	Maḥmūd veled-i Behlūl Beğ (2)	Ḳulb	13000			4	1595	DFE.RZ.d 169: 174–6
175	Besyān ve Būcyān ve Zīlān	Çāşnigīrbaşı Polād	Çapāḳçūr	6000	Ḳalender		1	1611	DFE.RZ.d 326: 262
176	Ḥakkārī	Zekeriyā b. Zeynel Beğ (1)	Vān	120000 (ze‘āmet)	Zeynel Beğ	ber vech-i taḥmīn	2	1570	DFE.RZ.d 33: 984
177	Ḥakkārī	‘Abdurraḥman (1)	Vān	20383			1	1571	DFE.RZ.d 33: 982
178	Ḥakkārī	Zekeriyā b. Zeynel Beğ (2)	Vān	120000 (ze‘āmet)			6	1572	DFE.RZ.d 34: 573
179	Ḥakkārī	Melek Meḥmed veled-i Bahā’eddīn Beğ	Vān, Bitlīs	20000	pedereş		1	1572	DFE.RZ.d 36: 830
180	Ḥakkārī	Bahā’eddīn birāder-i Zeynel Beğ	Vān, Bitlīs	80000			1	1572	DFE.RZ.d 36: 851

表 3 続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
181	Ḥakkārī	ʻAbdurraḥman (2)	Vān, Makū	44421	Aydın Ağa		3	1579	DFE.RZ.d 55: 1006–7
182	Ḥakkārī	Ḳāsım Ağa	Rūmī	45998	Velī el-fāriġ	[ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter]	1	1584	DFE.RZ.d 85: 652
183	Ḥakkārī	Meḥmed	Marand	8000		ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter	1	1586	DFE.RZ.d 85: 660–1
184	Ḥakkārī	ʻÖmer Ḥakkārī	Ḥoy-i Küçek	8666		ʻan ḥālī ve ḥarābe ḥāric ez defter	1	1587	DFE.RZ.d 118: 702–3
185	Ḥakkārī	Ḥasan Beğ veled-i Seyyidḥān Beğ	Ḥoy	100000		ber vech-i taḥmīn; ʻan ḥālī ve ḥarābe	1	1587	DFE.RZ.d 128: 807–8
186	Ḥakkārī	Meḥmed	Ḥoy, Selmās	10000		ber vech-i taḥmīn; ʻan ḥālī ve ḥarābe	1	1587	DFE.RZ.d 128: 800
187	Ḥakkārī	Süleymān	Ḥoy	10000		ber vech-i taḥmīn; ʻan ḥālī ve ḥarābe	1	1587	DFE.RZ.d 128: 800
188	Ḥakkārī	Ḳāsım	Ḥoy	10000		ber vech-i taḥmīn; ʻan ḥālī ve ḥarābe	1	1587	DFE.RZ.d 128: 802
189	Ḥakkārī	İbrāhīm	Marand	4000		ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter	1	1591	DFE.RZ.d 128: 816
190	Ḥakkārī	Zeyneddīn	Vān	6000		ber vech-i taḥmīn; ḥālī ve ḥarābe ḥāric ez defter	1	1591	DFE.RZ.d 128: 816 7
191	Ḥakkārī	Aḥmed	Ḥoy	21799	Seyyid Meḥmed Beğ		1	1592	DFE.RZ.d 156: 386
192	Ḥakkārī	ʻOṣmān veled-i Nāṣır, Ḳapıcıbaşı	Ḥoy	6000	ʻAlī	ber vech-i taḥmīn	1	1593	DFE.RZ.d 156: 423
193	Ḥakkārī	Seyyidḥān b. [Zeynel Beğ]	Vān	20000	[?] Ketḫudā ve Süleymān Çavuş		1	1596	DFE.RZ.d 206: 241–2
194	Ḥakkārī	ʻİzzeddīn Şīr	Vān	40000			1	1634	DFE.RZ.d 552: 125
195	Ḥakkārī	Mīr ʻAlī Şīr	Vān	40000	ʻİzzeddīn Şīr birādereş el-müteveffā		1	1636	DFE.RZ.d 552: 228
196	ʻİmādīye	Meḥmed Ağa	Moṣul	5000	İbrāhīm Çavuş		1	1555	DFE.RZ.d 7: 878
197	ʻİmādīye	Mīr Süleymān birāder-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ (1)	Moṣul	29210			3	1556	DFE.RZ.d 7: 879
198	ʻİmādīye	Pīrī	Kerkūk	7831			1	1561	DFE.RZ.d 14: 1099
199	ʻİmādīye	Ḫān İsmaʻīl veled-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ	Kerkūk	20000			1	1562	DFE.RZ.d 14: 1180
200	ʻİmādīye	Pīr	Kerkūk	6000			6	1562	DFE.RZ.d 14: 1185
201	ʻİmādīye	Rüstem veled-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ	Kerkūk	22614			6	1562	DFE.RZ.d 14: 1184
202	ʻİmādīye	Süleymān birāder-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ (2)	Kerkūk	30000			6	1562	DFE.RZ.d 14: 1183
203	ʻİmādīye	Rüstem Beğ	Kerkūk	20000			3	1566	DFE.RZ.d 17/1: 83
204	ʻİmādīye	Ḥācī Yūnus Ketḫudā	Moṣul	15900	Bālī		3	1566	DFE.RZ.d 17/1: 101
205	ʻİmādīye	Ḥaydar Ketḫudā	Kerkūk	20000	Şāḥḳulu b. İsmaʻīl		3	1568	DFE.RZ.d 12: 1205
206	ʻİmādīye	Ḫān İsmaʻīl veled-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ	Kerkūk	30390	Seyyid Ḳāsım		3	1571	DFE.RZ.d 36: 994–5
207	ʻİmādīye	Pīr Būdāḳ birāder-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ	Kerkūk	20000	Seyyid Ḳāsım		1	1572	DFE.RZ.d 36: 993
208	ʻİmādīye	Nūr ʻAlī	Moṣul	6000	Ḳāsım Maḥmūd el-müteveffā		1	1572	DFE.RZ.d 36: 888
209	ʻİmādīye	Seyyidḥān Beğ veled-i Ḳubād Beğ, mīr-i livā-i Sindī Süleymānī	Sindī Süleymānī	245000		[ber vech-i taḥmīn]	3	1580	DFE.RZ.d 58: 60–1
210	ʻİmādīye	İlyās veled-i Ḫıżır	Moṣul	4000	Ḥüseyin ʻAlī		1	1582	DFE.RZ.d 58: 52
211	ʻİmādīye	Küçek Maḥmūd veled-i Ḫıżır	Moṣul	3000	Elvend veled-i Ḫıżır		1	1582	DFE.RZ.d 58: 53
212	ʻİmādīye	Ebū Saʻīd Beğ veled-i Ḳubād Beğ, mīr-i livā-i Sincār	Sincār	222000			1	1584	DFE.RZ.d 73: 277–8
213	ʻİmādīye	Ḥamza	Moṣul	20500	Bekir Beğ		1	1585	DFE.RZ.d 98: 177
214	ʻİmādīye	ʻAlī	Kerkūk	20000			2	1586	DFE.RZ.d 98:68-9
215	ʻİmādīye	Zeynelābidīn	Kerkūk	20000	Meḥmed el-müteveffā		1	1586	DFE.RZ.d 98: 69–70
216	ʻİmādīye	Gulābī	Moṣul	40000	Murādḥān birāder-i Sulṭān Ḥüseyin Beğ		1	1587	DFE.RZ.d 98: 181–2
217	ʻİmādīye	Ḳubād birāder-i Murādḥān Beğ	Moṣul	11000			4	1587	DFE.RZ.d 98: 186
218	ʻİmādīye	Ḥüseyin	Naṣībin	4000	Aḥmed; Ṣādıḳ		1	1587	DFE.RZ.d 118: 463
219	ʻİmādīye	Ḥüseyin	Moṣul	7000	Maḥmūd		1	1588	DFE.RZ.d 101: 411
220	ʻİmādīye	Aḥmed	Moṣul	20000	Süleymān		1	1588	DFE.RZ.d 101: 409
221	ʻİmādīye	Ḥaydar	Moṣul	3000	Pīrī el-müteveffā		1,4	1593	DFE.RZ.d 174: 562
222	ʻİmādīye	ʻÖmer	Moṣul	4000	Bekir el-fāriġ		1	1594	DFE.RZ.d 174: 573
223	ʻİmādīye	ʻAbdullāh	Moṣul	4000	Meḥmed el-müteveffā		1	1596	DFE.RZ.d 174: 563–4
224	ʻİmādīye	Ḥasan, mīr-i livā-i Moṣul	Moṣul	434450	mīr-i sābıḳ		1	1600	DFE.RZ.d 233: 453
225	Cizre	Emīr Ġāzī Ketḫudā	Ḥamā	5999	—		5	1555	KK.d 213: 213
226	Cizre	Meḥmed Ketḫudā	Ḥasankeyf	1500/3000	Meḥmed ve Seyyid [el-müteveffā]		—	1599	KK.d 349: 25
227	Gürgīl	İbrāhīm Beğ birāderzāde-i Seydī Aḥmed Beğ, mīr-livā-i ʻAcūz ve Zāḫo	ʻAcūz ve Zāḫo	350000			1	1538	A.{RSK.d 1452: 311

表 3　続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
228	Ḥazo	Mīr Süleymān veled-i Bahā'eddīn Beğ	Ḥasankeyf	25400	Şemseddīn veled-i Şāh 'Alī [el-müteveffā]		1	1566	DFE.RZ.d 22: 19
229	Ḥazo	'Alī veled-i Ṣaruḫān Beğ	Bārgīrī	10990	Velīcān, mīr-i alay-i Bārgīrī		1	1571	DFE.RZ.d 33: 1003
230	Ḥazo	Meḥmed Ketḫudā	Bitlīs	5000			1	1572	DFE.RZ.d 36: 845
231	Ḥazo	Şeref veled-i Bahā'eddīn Beğ	Ḥasankeyf	45439			1	1572	DFE.RZ.d 36: 731–2
232	Ḥazo	'Abdī	Bitlīs	6000			1	1572	DFE.RZ.d 36: 849
233	Ḥazo	Bistām	Bitlīs	6000			1	1572	DFE.RZ.d 36: 849
234	Ḥizān	Şāh Ḥüseyin	Bitlīs	15000	—		5	1565	KK.d 75, 78b
235	Müküs	Mīr 'Abdullāh ve 'Imādeddīn [b. Aḥmed Beğ]	—	—	—		1	1555	KK.d 213: 170
236	Īsbāyird	Bahā'eddīn [b. Şeref Beğ]	Bitlīs	8000	—		—	1579	KK.d 236: 42
237	Şīrvī	Süleymān	Vān (Şīrvī, Şebistān)	22000	Mīr Ḥasan veled-i Süleymān Beğ	ber vech-i taḥmīn	1	1568	DFE.RZ.d 12: 1030
238	Şīrvī	Mīr Ḥüseyin [b. Abdāl Beğ]	(Şīrvī)	20000	Behrām el-müteveffā		1	1574	A.{RSK.d 1460: 94
239	Şīrvī	Şāh Meḥmed	[Şīrvī]	20000	Süleymān [el-müteveffā]		1	1578	KK.d 89: 5
240	Şīrvī	Mīr Melik veled-i Ḥasan	Vān (Īrūn)	20000	pedereş el-müteveffā	ber vech-i taḥmīn	1	1578	YB.04.d 203: 312
241	Şīrvī	Ḥān Abdāl veled-i Zeynel Beğ (1)	vilāyet-i Diyārbakır (Kōrmās)	20000	Mīr Meḥmed	ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter	1	1586	DFE.RZ.d 86: 989 90
242	Şīrvī	Ḥān Abdāl veled-i Zeynel Beğ (2)	vilāyet-i Diyārbakır (Kōrmās)	30000		ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter	2, 3	1588	DFE.RZ.d 101: 816
243	Şīrvī	Seyyidḥān Beğ [b. Zeynel] (1)	(Kernī, Şebistān)	22000	Zeynel Beğ el-fāriġ	ber vech-i taḥmīn; [ḥāric ez defter]	1	1597	DFE.RZ.d 206: 284–5
244	Şīrvī	Seyyidḥān veled-i Zeynel (2)	(Kernī, Şebistān)	22000		ber vech-i taḥmīn	2	1611	DFE.RZ.d 326: 522
245	Şīrvī	Süleymān [b. Zeynel]	Kernī/Şīrvī (Kernī, Şebistān)	22000	Seyyidḥān	ber vech-i taḥmīn	1	1612	DFE.RZ.d 326: 556–7
246	Şīrvī	Seyyidḥān [b. Zeynel] (3)	Vān (Kernī)	24000		ber vech-i taḥmīn	1	1612	DFE.RZ.d 365: 241
247	Şīrvī	Zeynel b. Ḳoçi [b. Zeynel]	Kārnī (Kernī)	22000	Ḳoçi pedereş el-fāriġ	ber vech-i taḥmīn	1	1631	DFE.RZ.d 501: 484
248	Maḥmūdī	Manṣūr veled-i Emīre Beğ	Bitlīs	20000			1	1538	DFE.RZ.d 4: 107
249	Maḥmūdī	Ḫalīl veled-i Ḥān Meḥmed	Aḳçaḳal'e	ze'āmet		[bilā-ta'yīn]	3	1572	DFE.RZ.d 34: 533–4
250	Maḥmūdī	Şīr b. Ḥasan Beğ	Tercil	43768	Ḥasan Beğ		3	1572	DFE.RZ.d 34: 560
251	Maḥmūdī	Şeyḫī b. Ḥasan Beğ	Vān	5999		ber vech-i taḥmīn	1	1572	DFE.RZ.d 36: 827
252	Maḥmūdī	'Īvaż veled-i Ḥasan Beğ (1)	Vān, Bitlīs	40000	Bahā'eddīn Beğ		3	1572	DFE.RZ.d 36: 830
253	Maḥmūdī	Abdāl b. Beşāret	(Ḫoşāb)	7(karye ve ḳal'e)		[bilā-ta'yīn]	2	1580	DFE.RZ.d 34: 572
254	Maḥmūdī	Süleymān veled-i Ḥasan Beğ (1)	Ḫoy	22000		ḥālī ve ḫarābe ḥāric ez defter	1	1580	DFE.RZ.d 55: 1038
255	Maḥmūdī	Bayındır birāderzāde-i Ḥasan Beğ	Ḫoy	20000		ber vech-i taḥmīn; ḥālī ve ḫarābe ḥāric ez defter	1	1580	DFE.RZ.d 55: 1028
256	Maḥmūdī	İsma'īl veled-i 'Abdullāh	Naḫcıvān	20000		ber vech-i taḥmīn; ḥālī ve ḫarābe ḥāric ez defter	1	1581	DFE.RZ.d 55: 1031
257	Maḥmūdī	'Īvaż Beğ veled-i Ḥasan Beğ, mīr-i livā-i Makū (2)	Makū	300000		ber vech-i taḥmīn	1	1581	DFE.RZ.d 55: 1075–6
258	Maḥmūdī	Ḳāsım Kātib	Bitlīs	6666	İlyās veled-i Dāvūd [birādereş] el-müteveffā		1	1586	DFE.RZ.d 85: 663–4
259	Maḥmūdī	Ḥaydar	Bitlīs	13333	İlyās veled-i Dāvūd [birādereş] el-müteveffā		1	1586	DFE.RZ.d 85: 664–5
260	Maḥmūdī	Rüstem	Ḫoy	20000		ber vech-i taḥmīn; ḥāric ez defter	3	1587	DFE.RZ.d 128: 766–7
261	Maḥmūdī	İbrāhīm birāder-i Abdāl	Ḫoşāb	7(karye ve ḳal'e)	Abdāl el-müteveffā	[bilā-ta'yīn]	1	1590	DFE.RZ.d 118: 705
262	Maḥmūdī	Bahā'eddīn [b. Ḥasan Beğ]	Vān	11500	'Alī		1	1590	DFE.RZ.d 128: 792-3
263	Maḥmūdī	'Īvaż Beğ veled-i Ḥasan Beğ, mīr-i livā-i Makū (3)	Makū	325000			3	1591	DFE.RZ.d 128: 805–6
264	Maḥmūdī	Süleymān veled-i Ḥasan Beğ (2)	Ḫoy	47490			3	1591	DFE.RZ.d 128: 871–2
265	Maḥmūdī	Süleymān veled-i Ḥasan Beğ (3)	Ḫoy	47490			2	1594	DFE.RZ.d 206: 300m
266	Maḥmūdī	Ḥācī Ketḫudā	Ḫoy	20999			2	1595	DFE.RZ.d 174: 611
267	Maḥmūdī	Mīr Şemseddīn [birāder-i Ḫalīl]	(Aḳçaḳal'e)	ze'āmet	[Ḫalīl veled-i Ḥān Meḥmed]	bilā-ta'yīn	2	1595	DFE.RZ.d 176: 549
268	Maḥmūdī	Muṣṭafā Beğ veled-i 'Īvaż Beğ, mīr-i livā-i Mākū	Mākū	450412	['Īvaż Beğ]		1	1596	DFE.RZ.d 174: 657–8

表3 続き

No.	ディルリク保有者の所属先	ディルリク保有者	ディルリク地：県（郷）	ディルリク額	前保有者	注記	パターン	テズケレの日付	典拠史料
269	Maḥmūdī	Yār ʻAlī [birāder-i İbrāhīm]	(Ḫoşāb)	7(ḳaryc ve ḳalʻc)	İbrāhīm birādereş el-müteveffā	[bilā-taʻyīn]	1	1611	DFE.RZ.d 326: 488
270	Maḥmūdī	Eyyūbī veled-i Yār ʻAlī	(Ḫoşāb)	7(ḳaryc ve ḳalʻc)	Yār ʻAlī el-fāriġ	[bilā-taʻyīn]	1	1619	DFE.RZ.d 381: 727; A.{NŞT.d 1238: 9
271	Bitlīs	ʻAlī Baba Ketḫudā	Bitlīs	20000			1	1578	DFE.RZ.d 55: 1008–9
272	Bitlīs	Dervīş Ketḫudā	Bitlīs, Mūş	37976	Ḫalīl Beğ mīr-i livā-i Siʻird		1	1578	YB.04.d 203: 315
273	Bitlīs	Ḥüseyin Ağa	Mūş	20000	Şükrüllāh el-müteveffā		1	1579	YB.04.d 203: 330
274	Bitlīs	Meḥmed	Bitlīs	15000	Ḥācī Ḥüseyin		1	1579	YB.04.d 203: 314
275	Bitlīs	Ḥācī	ʻĀdilcevāz	22846			1	1580	YB.04.d 203: 317
276	Bitlīs	Aḥmed	Bitlīs	20000	mīr-i livā-i Cemmāse		1	1580	DFE.RZ.d 55: 1002
277	Bitlīs	Ḥüseyin b. Aḥmed	Ḳalʻe-i Bāyezīd	10000		ber vech-i taḥmīn; ḫālī ve ḫarābe ḥāric ez defter	1	1580	DFE.RZ.d 55: 1014
278	Bitlīs	Ḥüseyin	Bitlīs	6000			1	1581	DFE.RZ.d 55: 1070
279	Bitlīs	Meḥmed	Bitlīs	6976	ʻAlī Baba Ser-i ʻAsker		1	1582	DFE.RZ.d 58: 120
280	Bitlīs	Şemseddīn [b. Şeref Ḫān]	Mūş	25000	Menlā Yūsuf		1	1587	DFE.RZ.d 118: 632
281	Bitlīs	ʻAlā'eddīn	Mūş	6000	Velī		1	1588	DFE.RZ.d 118: 632–3
282	Bitlīs	Ziyā'eddīn Yūsuf [b. Şeref Ḫān]	Vān	20000	Dihrān? el-müteveffā		1	1588	DFE.RZ.d 118: 673 4
283	Bitlīs	Mehdiḳulu	ʻĀdilcevāz	5000	Ḥācī el-müteveffā pedereş		1, 4	1589	DFE.RZ.d 118: 662
284	Bitlīs	Ḫalīl veled-i Aḥmed Beğ	Mūş	20080			1	1590	DFE.RZ.d 118: 635–6
285	Bitlīs	Uluḫān veled-i Ḫalef Beğ (1)	Bitlīs	10000	Ḥüseyin el-müteveffā		1	1591	DFE.RZ.d 128: 803 4
286	Bitlīs	Ḥüseyin	Bitlīs	22900			2, 3	1592	DFE.RZ.d 156: 340
287	Bitlīs	Dervīş veled-i Zeydānī	Bitlīs	3000	Şeyḫ Yūsuf		1	1592	DFE.RZ.d 156: 387
288	Bitlīs	Meḥmed	Mūş	53000			3	1592	DFE.RZ.d 156: 413
289	Bitlīs	Ziyā'eddīn [b. Şeref Ḫān]	Mūş	22000			1	1593	DFE.RZ.d 176: 638
290	Bitlīs	Seydī veled-i Şeref Ḫān	Bitlīs	20000	fāriġ Yūsuf (Yūnus?)		—	1598	DFE.RZ.d 206: 236
291	Bitlīs	Abdāl	Bitlīs	4750			2, 3	1598	DFE.RZ.d 206: 253
292	Bitlīs	Meḥmed [b. Şeref Ḫān]	Mūş	19000	ʻAlā'eddīn		1	1598	KK.d 348: 148/2b
293	Bitlīs	Uluḫān veled-i Ḫalef Beğ (2)	Bitlīs	30000	Meḥmed el-müteveffā		1	1601	DFE.RZ.d 246: 484
294	Bitlīs	Ḥüseyin veled-i Ḫalef Beğ	ʻĀdilcevāz	24866	Şāh Meḥmed		3, 4	1602	MAD.d 15402: 33
295	Bitlīs	Bekir	Mūş	31000	Ḳulu [el-müteveffā]		1	1608	KK.d 354: 258
296	Bitlīs	Şeref veled-i Ziyā'eddīn	Bitlīs	47000	Elvend		1	1611	DFE.RZ.d 326: 509
297	Bitlīs	Şemseddīn veled-i Ziyā'eddīn Beğ	ʻĀdilcevāz	63333	Süleymān el-müteveffā		1	1616	DFE.RZ.d 352: 251
298	Bitlīs	Abdāl [b. Ziyā'eddīn Beğ]	Bitlīs	45633	Şeref; Ziyā'eddīn		1	1618	DFE.RZ.d 381: 691–2
299	Bitlīs	Şeref [birāder-i Abdāl Beğ]	Bitlīs	45633			1	1622	DFE.RZ.d 412: 413
300	Bitlīs	Bedir veled-i Abdāl Beğ (1)	Mūş	50000	Aḥmed el-fāriġ		1	1632	DFE.RZ.d 504: 396–7
301	Bitlīs	Bedir [b. Abdāl Beğ] (2)	Mūş	49300			5	1646	DFE.RZ.d 619: 346
302	Bitlīs	Bedir [b. Abdāl Beğ] (3)	Bitlīs	49300			2	1649	DFE.RZ.d 631: 706

- ミルダスィー：エイル，パル，チェルミク県知事の関係者（表3：86–100）

エイル県知事の関係者のディリルク（表3：86–87）は2件だけ確認できるが，エイル県ではなく，ハルプト県とクルプ県でディルリクを保有した。パル県知事の関係者（表3：88–94）はすべてハルプト県でディルリクを保有した。エイル県とパル県はヒュキューメトであるため，ティマール制不施行というヒュキューメトの原則からすれば，両県でディルリクの分配がないのは当然である。エイル県知事のディルリク地もハルプト県にあることを考え併せると，エイル県とパル県に近いハルプト県が両県の知事とその関係者のディルリク地として設定されていたのだろう。チェルミク県知事の関係者（表3：95–100）はチェルミク県でディルリクを保有した。

- ズィルキー：デルズィニー，ギルディカン，アタク，テルジル県知事の関係者（表3：101–117）

デルズィニー県知事の関係者のディルリク保有は確認できない。ギルディカン県知事の関係者については，ギルディカン県で 2 件（表 3：101–102），スィイルト県で 2 件（表 3：103–104）確認できる。アタク県知事の関係者（表 3：105–107）はアタクとチャパクチュル両県で，テルジル県知事の関係者（表 3：108–117）はテルジル県以外にチャパクチュルとクルプ両県でディルリクを保有した。繰り返しになるが，17 世紀初頭にリヴァーからヒュキューメトとなったテルジル県では，ヒュキューメトとなった後もティマール制が継続したことが確認できる。

・スヴェイディー：チャパクチュル，ハンジュク，ゲンジェ県知事の関係者（表 3：118–162）

チャパクチュル，ハンジュク，ゲンジェの各県知事の関係者は，いずれの県においてもディルリクを保有した。ヒュキューメトであるゲンジェ県でもディルリク授与が見られる。ゲンジェとハンジュク両県では，クルド系県知事の関係者にも推定額のディルリクが授与された。

・スレイマニー：クルプ，ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン（＝メファリキン）県知事の関係者（表 3：163–175）

クルプ，ベスヤン・ブジュヤン・ズィランの各県知事の関係者は，1 件を除き，すべてクルプ県でディルリクを保有した。

・ハッキャリ：ハッキャリ県知事の関係者（表 3：176–195）

ヒュキューメトを管轄するハッキャリ県知事の関係者は，ハッキャリ県外でディルリクを保有した。ディルリク地としては，ヴァン県に加えて，ホイ県やマランド県などハッキャリ県に近い新たな征服地が多い。

・イマディエ：イマディエ県知事の関係者（表 3：196–224）

ヒュキューメトを管轄するイマディエ県知事の関係者もイマディエ県外でディルリクを保有した。ディルリク地としては，モスル県とキルクーク県が多い[20]。

・ジズレ：ジズレ，グルギル県知事の関係者（表 3：225–227）

ヒュキューメトを管轄するジズレ県知事の関係者については，2 件（表 3：225–226）のディルリク保有が確認できる。いずれのディルリク地も，ジズレ県ではなく，ハマー県とハサンケイフ県である。このほか，グルギル県知事の兄弟がジズレと領域と接するアジュズ・ザホ県知事となり，そこでディルリクを保有したケースがある（表 3：227）。

・ハゾ：ハゾ県知事の関係者（表 3：228–233）

ヒュキューメトを管轄するハゾ県知事の関係者も，ビトリス県やハサンケイフ県など，ハゾ県外でディルリクを保有した。

・ヒザン：ヒザン，ミュキュス，イスパイルト県知事の関係者（表 3：234–236）

ヒュキューメトを管轄するヒザン県知事の関係者については，1 件（表 3：234）のディルリク保有が確認できる。ディルリク地は，ヒザン県ではなく，ビトリス県である。ミュキュス県知事の関係者のディルリクも 1 件（表 3：235）だけ確認できるが，史料に記載がないためディルリク地と額は不明である。イスパイルト県知事の関係者のディルリクも 1 件確認できるが，ディルリク地はビトリス県である。

・シルヴィー：シルヴィー県知事の関係者（表 3：237–247）

シルヴィー県知事の関係者は，シルヴィー，

20）モスルとキルクーク両県でのイマディエ一族のディルリク保有については Bayatlı 1999: 138–9 でもわずかに触れられている。

ケルニー，イルン，シェビスタン，キョルマスという5つの郷にディルリクを保有した。『ディルリク発給簿』では各郷の所属先が一致しないケースが見られるが，いずれの郷もシルヴィーの支配領域内にある[21)]。シルヴィー県知事の関係者のディルリクも，ゲンジェ，ハンジュク，ミュキュス諸県でのディルリクと同様に，推定額で授与された。

・マフムーディー：マフムーディー県知事の関係者（表3：248–270）

ヒュキューメトを管轄するマフムーディー県知事の関係者は，マフムーディー，ヴァン，ビトリス諸県に加えて，マフムーディー県に近い新たな征服地でディルリクを保有した。マフムーディー県知事のディルリクがマフムーディー県に存在しない一方で，マフムーディー県知事の関係者のディルリクはマフムーディー県にある。マフムーディー県にあるマフムーディー県知事の関係者のディルリク（表3：249，253，261，267，269–270）は，イスパイルト県知事のディルリクと同様に，額が無記載のまま授与された。

・ビトリス：ビトリス県知事の関係者（表3：271–302）

ビトリス県知事の関係者はほぼビトリス県でディルリクを保有した。繰り返すが，ビトリス県はヒュキューメトであるにも拘らず，ティマール制が施行された。これは，16世紀中頃にビトリス県知事がサファヴィー朝に亡命した後にティマール制が導入され，その後，県知事の息子がオスマン朝に帰還した後もティマール制が継続したことによる。

以上から，クルド系県知事の関係者のディルリクのうち，ディルリク保有が確認できないのがデルズィニーである。ミュキュス県知事の関係者については，史料に記載がないためディルリク地が特定できない。自身が属する県以外でディルリクを保有したのがエイル，パル，ハッキャリ，イマディエ，ジズレ，グルギル，ハゾ，ヒザン，ミュキュス，イスパイルト県知事の関係者である。このうち，グルギル，ミュキュス，イスパイルトを除く諸県がヒュキューメト型の県である。自身が属する県でディルリクを保有したのがマズギルト，ペルテク，サクマン，チェルミク，ギルディカン，アタク，テルジル，チャパクチュル，ゲンジェ，ハンジュク，クルプ，シルヴィー，マフムーディー，ビトリス県知事の関係者である。このうち，テルジル，ゲンジェ，マフムーディー，ビトリスがヒュキューメト型の県である。

以上，クルド系県知事とその関係者のディルリク保有の有無とディルリク地について見てきた。クルド系県知事については，オスマン朝の一般の県知事のように，基本的に所轄の県でディルリクを保有した。しかしヒュキューメトを管轄するクルド系県知事については，ディルリク保有が確認できないケースや，所轄の県以外でディルリクを保有するケースが多々見られた。クルド系県知事の関係者についても，クルド系県知事と同様に，基本的に所属する県でディルリクを保有した。しかしヒュキューメトに属するクルド系県知事の関係者については，自身が所属する県以外でディルリクを保有するケースが多かった。ヒュキューメト型の県のうち，クルド系県知事とその関係者のディルリクがヒュキューメト内で確認できたのは，テルジル，ゲンジェ，マフムーディー，ビトリスの4県である。

繰り返すと，ヒュキューメト型の県のうち，エイル，パル，ハッキャリ，イマディエ，ジズレ，ハゾ，ヒザン諸県ではディルリク保有が確認されず，クルド系県知事とその関係者は県外でディルリクを保有した。同じヒュ

21）Šaraf Ḫān Bidlīsī, *Šaraf-nāma*, 231–8.

キューメト型の県のうち，テルジル，ゲンジェ，マフムーディー，ビトリス諸県ではディルリクが分配された。リヴァー型の県のうち，ペルテク，サクマン，マズギルト，チェルミク，ギルディカン，アタク，チャパクチュル，ハンジュク，クルプ，ミュキュス，イスパイルト，シルヴィーの 12 県ではディルリク保有が確認されたが，デルズィニーとグルギル両県ではディルリク保有が確認できなかった。

クルド系県知事とその関係者のディルリク保有が確認できないエイル，パル，ハッキャリ，イマディエ，ジズレ，ハゾ，ヒザンといったヒュキューメト型の県，そしてデルズィニーとグルギルというリヴァー型の県については，租税台帳が伝世しておらず，『ディルリク発給簿』でも他のディルリク保有者が確認できないため，そもそもティマール制が実施されなかったと考える。ただし本章で見てきたように，これらの県知事とその関係者の多くは自身が管轄もしくは所属する県以外でディルリクを保有した。それゆえティマール制不施行の県についても，クルド系県知事とその関係者は実質的にはティマール制に組み込まれていたといえるだろう。

4　クルド系諸県における オジャクルクと租税調査

筆者はかつてオスマン朝下のクルド系諸県における「オジャクルク（ocaḳlıḳ）（＝ユルトルク（yurtluḳ），ユルトルク＝オジャクルク）」という用語について考察した[22]。それによると，オジャクルクとはクルド系アミールが保有した①県の世襲的な管理，②ディルリクの世襲的な保有，③部族の管理という 3 つの既得権を指した。②ディルリクの世襲的な保有に関しては，クルド系アミールの関係者にも認められた権利であった。中央からディルリクの相続が承認されると『ディルリク発給簿』に記録され，それに従って勅許状が発行された[23]。そのためオジャクルク継承時には前任者の勅許状と『ディルリク発給簿』での記載内容の照合が行われ，確認された後，相続が認められた[24]。

オジャクルクによるディルリク保有について，チェミシュゲゼク一族に見られる 2 つの例を見てみよう（表 3:23，24）。1 つは，前ペルテク県知事リュステム・ベイの孫ミールザールが，ユルトルク＝オジャクルクとして 40039 アクチェ分のディルリクを保有した父アリー・ベイの死亡により，40039 アクチェのうち，チェミシュゲゼク県にある 20039 アクチェ分の古くからのユルト（＝ディルリク）が自身に授与されるよう上奏した件である。上奏の結果，アリー・ベイが保有した 40039 アクチェのディルリクのうち，20039 アクチェ分がオジャクルクとしてミールザールに授与された。もう 1 つは，ペルテク県知事バイスンクル・ベイが，彼の兄弟であり，上述のミールザールの父親でもあるアリー・ベイの 40039 アクチェのディルリクのうち，ペルテク県にある 2 万アクチェ分が自身の息子ミュルセルに与えられるよう上奏した件である。上奏の結果，代々ユルトルクとして保有してきた 2 万アクチェ分がミュルセルに与えられた。この例からわかるように，クルド系諸県では，オジャクルクの名のもとに，父から子へだけではなく，一族内でもディルリクが継承されていた。

さて，チェミシュゲゼク一族が保持した勅許状に以下の条項が記されており，それはテズキレにも記録された。

22）齋藤 2006a.
23）DFE.RZ.d 101: 816; DFE.RZ.d 118: 705.
24）例えば，（表 3：161）のハンジュクの事例では「父親が保有した 2 つの勅許状にはユルトルク＝オジャクルクとあるので……共同保有でティマールを息子たちに（与えるよう）勅許状を作成せよ」とある。

ピール・ヒュセイン・ベイの息子たちのうち，父の支配領域（ülke）からサンジャクやゼアーメト（，ティマール）を相続した者たちは……遠征に従軍するように。彼らのサンジャクやゼアーメト（，ティマール）が，（一族以外の者により）占拠されないよう，州の書記（vilāyet kātibleri）により変更（tebdīl ü taġyīr）されないよう，不足にならないよう，多く与えられないよう，クルディスタン方式（Kūrdistān üslūbı）に従って保有されるように……[25]。

このチェミシュゲゼク一族のディルリク保有に関する条項は，前保有者の勅許状に記されている限り，次の保有者の勅許状にも記載された。上の条項からは，遠征への従軍という条件でディルリクが授与されていたことがわかる。そして彼らが保有したディルリクは，一族以外の者により保有されず，州の書記により変更されず，額は過不足なく，クルディスタンの習慣に従って世襲的に保有されることになっていた。

ところで上の勅許状にある「州の書記により変更されない」という文言は租税調査の禁止も含むと考えられる。1565年，マズギルト，ペルテク，サクマンの各県での租税調査が決定されたが，マズギルト，ペルテク，サクマンの県知事たちは勅許状に記載された条項を理由に租税調査の中止を上奏し，結局調査は行われなかった[26]。チェミシュゲゼク一族が管理したマズギルト，ペルテク，サクマンの各県では，オスマン朝征服直後，ピール・ヒュセイン・ベイの時代に租税調査が行われたが，ピール・ヒュセイン・ベイ以後，県知事たちは勅許状を盾に租税調査を行わせないよう努めたのである。クルド系諸県のうち，リヴァーではティマール制が実施され，ヒュキューメトではティマール制が実施されないという原則があった。ティマール制の実施には租税調査が前提となるため，この原則は当然租税調査の実施の有無にも及ぶ。つまりリヴァーでは租税調査は行われるが，ヒュキューメトでは租税調査は行われないというものである。それにも関わらず，上に示したペルテク，サクマン，マズギルトの事例からも明らかなように，リヴァーであっても一様に租税調査が実施されるとは限らなかった[27]。

クルド系諸県における租税調査の不実施について「ウルケ（ülke）」という語が鍵となった事例がある。「土地，地域，地方，国土」等の意味を有するウルケであるが，クルド系諸県のうち，ウルケであるという理由で租税調査の対象外となったのはグルギル県と後述するイスパイルト県である。このうち，グルギル県については，1575年に「ディヤルバクル州に属するクルディスタン諸県のうち，グルギル県，ジズレ，イマディエは……ウルケであり，租税調査は行われず……」[28]とあるように，ヒュキューメトであるジズレ，イマディエ両県とともに，ウルケであるという理由で租税調査の対象外とされた。グルギル県は，本来租税調査が実施されるリヴァー型の県であるにも拘らず，租税調査の実施を免除されていたのである。ここからは，リヴァー型の県でも，ウルケとされることにより，ヒュキューメトと同等の租税調査の不実施という

25）DFE.RZ.d 12: 865, 868–70, 874–6, 944–5, 950–1; DFE.RZ.d 33: 867–976, 1029, 1044–53; DFE.RZ.d 34: 310, 320, 323; DFE.RZ.d 36: 558–9, 562; DFE.RZ.d 55: 457, 460–3; DFE.RZ.d 62: 624–5, 790; DFE.RZ.d 65: 628–9, 706–7; DFE.RZ.d 73: 366–7, 374; DFE.RZ.d 86: 642, 657; DFE.RZ.d 101: 17, 28, 41, 49, 295–6, 298, 352–3, 370, 372, 391, 420, 747; DFE.RZ.d 118: 136, 217, 219; DFE.RZ.d 176: 91-2, 103–4, 107–8, 199–200; DFE.RZ.d 621: 75, 95, 114, 314, 343; DFE.RZ.d 653: 18–30.

26）KK.d 75: 3a.

27）ヒュキューメト型のビトリス県でも，県知事の反対により租税調査が中断された事例がある（A.{DVNS.MHM.ZYL.d 4: no.203, no.228）。

28）A.{DVNS.HADR.d 1: 247.

権利を有したことがわかる。

ティマール制の施行には，租税調査を行い，ディルリクの収入源となる税源を確定することが前提となる。しかし上に示した諸事例から分かるように，租税調査が実施されることなく，ティマール制が実施されたクルド系諸県が存在したのである。

5　クルド系諸県における特殊なディルリク

第 3 章では，クルド系諸県においてティマール制がどのように実施されたのかを検討した。その際，推定額のディルリクと額が無記載のディルリクという特殊なディルリクがあることを指摘した。本章ではこれらの特殊なディルリクについて租税調査との関わりから検討する。

クルド系諸県のうち，ティマール制施行にも関わらず，租税台帳が現存していないのはギルディカン，ゲンジェ，ハンジュク，ミュキュス，イスパイルト，シルヴィー，マフムーディーの 7 県である。このうち，ギルディカン[29] を除くゲンジェ，ハンジュク，ミュキュス，イスパイルト，シルヴィー，マフムーディーの 6 県では，推定額のディルリクおよび額が無記載のディルリクが授与されていた。以下，本章ではクルド系諸県における推定額のディルリクと額が無記載のディルリクについて順を追って見ていこう。

5-1　推定額のディルリク

一般に，推定額（ber vech-i taḫmīn）のディルリクは，クルド系諸県をはじめとして，バルカンからアナトリア，アラブ地域まで，ティマール制が施行された多くの県で確認できる[30]。推定額のディルリクとは，ディルリクの収入源となる農村や枝村（mezraʿa）からの税収が調査の対象とならないため，租税台帳に記録されない税源のことをいう[31]。通常，一般の県では個々の農村や枝村の税額がそれ

29）ギルディカン県では，県知事ナスル・ベイ（表 2：41）の処刑後，租税調査が行われ，一般の県に移行する予定であった（A.{DVNS.MHM.d 2: no.1337, no.1347）。しかしギルディカンの部族民の上奏を受けて，1556 年にギルディカン一族のミール・ハリル・ベイに県知事職と 20 万アクチェ分のディルリクが授与された（表 2：42）。これ以外にも，2 件（表 3：101–102）のディルリクが確認できるため，ギルディカン県で租税調査が実施されたと理解できる。しかし 1575 年の記録に「ギルディカン県は…簡易帳に記録のある県ではなく」（A.{DVNS.HADR.d 1: 328）とあることから，租税調査は行われたものの，調査結果が記録されないままティマール制が施行された可能性が高い。

30）例えば，ボスニア Bosna，ブディン Budūn，スィゲトヴァル Sigetvār，スィリストレ Silistre，セメンディレ Semendire，スィレム Sirem，ピルゼリン Pirzerin，ポジェガ Pojeǧa，テメシュヴァル Ṭemeşvār，ヴィディン Vidin，アーミド，トルトゥム Tortūm，チュルドゥル Çıldır，スィンジャル Sincār，ハラブ Ḥaleb，シャーム Şām，モスル，サファド Ṣafed，ティクリート Tikrīt，ジャヴァーズィル Cevāzir，バグダード Bağdād など（MAD.d 7: 84 (Image no.); DFE.RZ.d 5: 136–7, 679–741, 782, 827; DFE.RZ.d 28: 983; DFE.RZ.d 33: 867–976, 1029, 1044–53; DFE.RZ.d 34: 102, 310, 320, 323, 387, 496, 536; DFE.RZ.d 101: 49; DFE.RZ.d 117: 828; DFE.RZ.d 186: 86–7）。

31）通常，推定額のディルリクは，①推定額で台帳無記載（ḫāric ez defter），②推定額で台帳無記載さらに荒廃（ḫālī ve ḫarābe），③推定額で荒廃という 3 パターンで授与されることが多い。台帳無記載とは，前の租税調査で記録されたにも関わらず，新たな調査で何らかの理由により記録されなかった，または租税調査の間に新たに発見され記録された税源のことである（İnalcık 1987: XXV–XXVI）。②推定額で台帳無記載さらに荒廃の場合，再墾という条件が付随することが多く，荒廃した農村や枝村を再墾する条件で，そこからの推定税収がディルリクとして授与された。新たな征服地では，租税調査までに再墾する条件で台帳無記載・推定額のディルリクが授与されることがあった（DFE.RZ.d 55: 1028, 1033–4, 1040）。ただし，期限に関する記載がないまま再墾という条件で授与されたケースの方が多い（cf. DFE.RZ.d 58: 116–7, 196, 199; DFE.RZ.d 67: 535, 539; DFE.RZ.d 85: 660; DFE.RZ.d 98: 100–2, 112–4; DFE.RZ.d 128: 815-7）。③推定額で荒廃の場合，再墾という条件なしで授与されるケースが見られたが，これはアラブ地域で多く確認できる。またアラブ地域に関する記録では，荒廃は ḫālī ve ḫarābe に代わって ʿāṭil wa bāṭil が使われるケースが多い（cf. MAD.d 29: 272b–273a, 275a; MAD.d 17642: 674, 699–700, 709–10; DFE.RZ.d 85: 496）。

ぞれ推定と記録されたのに対し，クルド系諸県で特徴的なのは，郷や県単位の総税額がまとめて推定と記録されたことである。要するに，クルド系諸県では郷や県単位で租税調査が実施されないまま，ティマール制が施行されていたことになる。無論クルド系諸県とは関わりのない新たな征服地においても，郷や県単位で総税額がまとめて推定と記されることはあるが，その場合は租税調査を行うまでの暫定措置であるため，クルド系諸県の事例とは性格を異にする。

クルド系諸県での推定額のディルリク保有の事例を見ていこう。（表 2）と（表 3）によると，ゲンジェ（表 2：75，77–80；表 3：130–131，133–134，138–139，141–159），ハンジュク（表 3：160–162），ミュキュス（表 2：106–108），シルヴィー（表 2：112–113；表 3：237，240–247）諸県で推定額のディルリクが見られる。

ゲンジェとハンジュク両県の事例から見ていこう。オスマン朝による征服後，ハンジュクは県ではなくゲンジェ県に属する郷であった。当時のゲンジェ県知事スルタン・アフメト・ベイは，自身が率いる部族民や部族外出身の在郷騎士に「被服代（donluḳ）」と称して農村の収穫物の取り分を決定し，自身は残りの税収を所有するという形でティマール制が開始された[32]。この時，授与されたディルリクはゲンジェ県の簡易帳に記録のある県知事のディルリクの一部であったという。つまりスルタン・アフメト・ベイは自身のディルリクの一部を部族民や騎士に譲渡したことになる。しかし前述のゲンジェ県の簡易帳は伝世しておらず，この時ゲンジェ県で授与されたディルリクの記録も残っていないため，詳細は不明なままである。

スルタン・アフメト・ベイの死後，ゲンジェ県はゲンジェとハンジュクの 2 県に分割され，スルタン・アフメト・ベイの 2 人の息子がそれぞれゲンジェとハンジュクの県知事となった。この時代にようやくゲンジェとハンジュク両県のディルリクに関する記録が『ディルリク発給簿』に現れる。この頃，両県でのディルリクはほぼ全て推定額と記されている。スルタン・アフメト・ベイの時代の簡易帳の記録があるとはいえ，十数年に渡り租税調査が行われず，県知事が代替わりした後も租税調査は行われなかった。スルタン・アフメト・ベイの時代の記録が更新されなかったために，ディルリクが推定額で記録されたとも考えられる。その後，ゲンジェ県はヒュキューメト，ハンジュク県はリヴァーに分類されたため，少なくともリヴァー型のハンジュク県では租税調査が実施されるべきであるが，そのような記録は残っていない。

上述のスルタン・アフメト・ベイの息子たちは，父の時代に授与されたディルリクについて，元々県知事用のディルリクであるため，特に部族外出身の保有者が死去した場合は自分たちに返還されるべきだと上奏し，その主張は認められた[33]。ここから，ゲンジェとハンジュク両県でのディルリクが，本来クルド系県知事とその関係者のために設定されたものであると理解できる。

ミュキュス県に関するディルリクの記録はキャルキャル県知事のものに限られる。1556 年，当時のミュキュス県知事アフメト・ベイ Aḥmed Beğ の兄弟であるハサンに，国境防衛と遠征での功労により，ミュキュス県の半分が授与された[34]。ハサンに授与された県はキャルキャル県と呼ばれ，彼には推定 30 万アクチェのディルリクが割当られた（表 2：106）。ハサンのディルリク地はミュキュス県とキャルキャル県の両県に設定されたため，ミュキュス県でもティマール制が実施されたことになる。ただしハサンのディルリク

32）KK.d 88: 140, 333.
33）KK.d 88: 251, 333.
34）A.{DVNS.MHM.d 2: no.426; DFE.RZ.d 7: 397–8.

額は推定であり，ハサン以降のキャルキャル県知事のディルリクも推定額であるため，ミュキュス県とキャルキャル県では租税調査が行われなかったと考えられる。

シルヴィー県では県知事とその関係者のディルリクのみ設定されており，『ディルリク発給簿』に記録のあるディルリクはすべて推定額で授与された。例えば，シルヴィー県知事（キュフラー・アミール）の息子ハン・アブダルは，ディヤルバクル州に属するキョルマス族の部族長となり，台帳無記載のキョルマス郷に推定額のディルリクを保有した（表 3：241–242）。このほかにも，シルヴィー・アミールのうち，イルン・アミールの一族がヴァン県に属するイルン郷に推定額のディルリクを保有した（表 3：240）。「シルヴィーの半分の県」を管轄したケルニー・アミールの一族のうち，セイイドハン・ベイがケルニー郷とシェビスタン郷に推定額のディルリクを保有した（表 3：243–244）。しかし兄弟のスレイマンと争った結果，セイイドハン・ベイがケルニー郷を，スレイマンがシェビスタン郷を推定額のディルリクとして保有することになった（表 3：245–246）。『ディルリク発給簿』ではケルニー郷とシェビスタン郷の所属先としてヴァン，シルヴィー，ケルニーの 3 県があげられており，記述時の混乱が見て取れる。上述のイルン郷の所属先がシルヴィー県ではなくヴァン県であるという記述も併せて考えると，オスマン朝がシルヴィーの支配領域を正確に把握していなかった可能性がある。

クルド系諸県ではないが，飛び地での推定額のディルリクが租税調査の対象となったケースがある。1570 年，ヴァン県のヴァスタン Vasṭān 郷で，ハッキャリ県知事の息子ゼケリヤが，父から相続した推定 12 万アクチェのディルリクを保有した（表 3:176）。この直後に租税調査が行われ，ゼケリヤのディルリクは 12 万アクチェと確定された（表 3：178）。ヴァスタンは，オスマン朝征服以前からハッキャリ・アミールの支配領域であったが，オスマン朝編入後もハッキャリ・アミールの影響下にあった。

ハッキャリの飛び地ヴァスタンは，ヴァンの南西約 35 キロに位置することもあって，ハッキャリの本拠地よりも早くオスマン支配下に入った。オスマン朝編入時，ヴァスタンを支配していたのはセイイド・メフメト・ベイ Seyyid Meḥmed Beğ であり，少なくとも 1534 年には支配を確立していた[35]。彼はオスマン朝によりヴァスタン県知事に任命されたが[36]，1555 年頃に処刑されると，おそらくヴァスタン県も消滅した。しかしながら，ヴァスタン県消滅後もヴァスタンにおけるハッキャリ・アミール一族の権利はディルリクとして相続された[37]。

ハッキャリ・アミール一族のヴァスタンとの関わりから，オスマン朝のハッキャリに対する政策が読み取れる。征服直後は征服前の政治状況を考慮し，ハッキャリ・アミールをヴァスタン県知事に任命したが，約 20 年後に行政区域の変革を行い，ヴァスタン県を廃止した。ただしヴァスタン県廃止後も，ヴァスタンとハッキャリ・アミール一族の関わりを断つようなことはせず，一族の土地保有に関わる権利を特殊なディルリクとして存続させた。ヴァスタン郷での一族のディルリクは推定額で保有されたが，これも約 15 年後には通常のディルリクに近づけるべく租税調査が実施された。ここからは，オスマン朝が征服地を徐々に体制内に取り込もうとする姿勢がうかがえる。

上述のように，一部のクルド系諸県では，

35）E. 8040/2.
36）A.{RSK.d 1452: 294; Sahillioğlu, *Topkapı Sarayı Arşivi H.951–952 Tarihli ve E-12321 Numaralı Mühimme Defteri,* 155.
37）DFE.RZ.d 7: 384; MAD.d 4659: 11b.

通常の推定額のディルリクと違い，郷または県単位の総税額がまとめて推定額とされる特殊なディルリクが存在した。同時代の他のティマール制施行地域で同様のケースが見られたのは，16 世紀中頃にエルズルム州に属したシャヴシャト Şāvşad 県やリヴァネ Livāne 県など，グルジア系の旧支配層がオスマン朝下でも地方行政組織の責任者に任命された辺境地域においてである[38]。

4-2　額が無記載のディルリク

額が無記載（bilā-taʿyīn）のディルリクとは，推定額のディルリクと同様に，租税調査の不実施により，租税台帳に記録のない税源を意味する。推定額のディルリクと額が無記載のディルリクの違いは，その名が示すように，推定額がディルリクの推定税収であるのに対し，額が無記載の方はディルリク額がなく，ディルリクの収入源となる農村や枝村の名だけが記録されたことである。『ディルリク発給簿』においては，推定額のディルリクは，テズキレのディルリク内訳の箇所に推定と記載されたが，額が無記載のディルリクは，ディルリク内訳の箇所には何も記録されず，勅許状発行までの状況説明の文中に「決まっていない（bilā-taʿyīn, nā-maʿlūm, maʿlūm olmayan）」と記された。

一例をあげよう。イスパイルト県で確認できるのは県知事のディルリクだけである。イスパイルト県知事は「イスパイルト城塞と 31 村」を額が無記載のディルリクとして保有した（表 2:109–110）。当初イスパイルト県知事のディルリクは「ウルケであるため，総額は算出されなかった」[39]。しかし 1575 年頃，イスパイルト県は 2 県に分割が可能という理由で，県の税収を算出するために調査が行われた。調査の結果，イスパイルト県の税収は 111810 アクチェと判明したが，これは 2 県知事分のディルリクとは成り得ないため，県の分割は取りやめとなり，以前と同様，イスパイルト県知事が管轄することが決定された[40]。

租税調査が行われたにも拘らず，イスパイルト県で通常のティマール制が施行されることはなかった。1575 年以後のイスパイルト県知事のディルリク額が記された史料は伝世していないが，ヴァン州に属するアガキス Aġākīs 県知事がイスパイルト県内に保有したディルリクの記録が残っている[41]。1580 年と 1598 年の記録では，アガキス県知事のディルリク地がある郷名は記載されず，イスパイルト県内にディルリク地があることだけ

38）DFE.RZ.d 14: 396, 405–9; DFE.RZ.d 15: 142–3, 157–60; DFE.RZ.d 33: 273; DFE.RZ.d 62: 776–8, 865–9; DFE.RZ.d 280: 185–8, 193–5; DFE.RZ.d 300: 301–3, 320–2. ティフリス州総督やチュルドゥル州総督のハスにいたっては，税源の詳細が一切省かれ，推定総額のみが記録されたこともある（DFE.RZ.d 117: 820, 830）。特にリヴァネ郷では，オスマン朝の征服から 70 年，17 世紀に入っても租税調査が行われなかった。

39）MAD.d 563: 98.

40）A.{DVNS.HADR.d 1: 225.

41）DFE.RZ.d 55: 1012–3; DFE.RZ.d 206: 286–8. Šaraf Ḫān Bidlīsī, *Šaraf-nāma*, 220 によると，アガキスは元々イスパイルト県に属する郷であった。16 世紀半ば，スルタン・イブラヒム Sulṭān İbrāhīm がイスパイルト・アミールの時代，彼の兄弟ミール・シェレフ Mīr Şeref がイスパイルト県からアガキス郷を分離し，自身がアガキス県知事となった。ミール・シェレフがアガキス県知事であったことはオスマン朝の史料からも確認できる（A.{DVNS.MHM.d 1: no.40; KK.d 74: 418）。この時，アガキス県知事のディルリクがイスパイルト県にも設定され，ミール・シェレフの後も，アガキス県知事のディルリクとして継続したのだろう。ゆえに，イスパイルト県のディルリクも本来はイスパイルト・アミール一族のためのものであったと思われる。前述のミール・シェレフの後は暫くオスマン朝の官人がアガキス県知事に任命されたが（KK.d 74: 180; MAD.d 563: 99; KK.d 222: 243; KK.d 229: 63; KK.d 237: 208; KK.d 248: 83），16 世紀末から 17 世紀前半にかけては，ハッキャリやシルヴィーのアミール一族も県知事となった（A.{DVNS.MHM.d 60: no.230; KK.d 253: 157; A.{DVN 13/1; A.{RSK.d 1524: 117）。

わかる。ディルリクの内訳についても，農村や枝村の名はあるが，税額は記されていない。そしてイスパイルト県単位でのディルリクの小計額は算出されず，アガキスとイスパイルトの両県のディルリクの総計額がまとめて推定額で記された。イスパイルト県での租税調査の実施にも拘らず，その調査結果が反映されることはなかったのである。

次に，マフムーディー県の事例を示そう。マフムーディー県にはマフムーディー県知事のディルリクはなく，県知事であるアミールの一族のディルリクだけが存在した。そしてマフムーディー県にあるディルリクはすべて額が無記載のまま授与された。まず，マフムーディー県のアクチャカレ郷から見ていこう。元々アクチャカレ郷はマフムーディー・アミールの支配領域にあったが，1557 年までにマフムーディー県から分離してアクチャカレ県となり[42]，後述するハリルとミール・シェムセッティンの父ハン・メフメトが県知事となった[43]。その後，1595 年までには再びマフムーディー県に属する郷となっている[44]。さて，前述のハリル（表 3：249）は，アクチャカレ県に属する農村や枝村等からの税収を額が無記載の「ゼアーメト」として保有した。ハリルが保有したディルリクは，その後，彼の兄弟ミール・シェムセッティン（表 3：267）により相続された。次に，マフムーディー県のホシャプ郷について見ていこう。アブダル（表 3：253）は，ホシャプ郷の「城塞と農村，総計 7」を未定額の「ゼアーメト」として保有した。アブダルのディルリクは，その後，アブダルの兄弟イブラヒム（表 3：261），イブラヒムの兄弟ヤール・アリー（表 3：269），ヤール・アリーの息子エイユビー（表 3：270）へと相続された。

マフムーディー県におけるディルリクは，マフムーディー・アミールの一族が世襲的に保有し，租税調査の対象とならなかった。これは通常のティマール制からかけ離れており，マフムーディー一族による私的な土地保有という印象が強い。マフムーディー県は，ハッキャリ県と並び，サファヴィー朝領に隣接する地域であるため，国境防衛を考慮し，マフムーディー一族の土地保有に関わる権利を特殊なディルリクとして容認したとも考えられる。

ところで，額が無記載のディルリクはクルド系諸県以外の県でも 1 件だけ確認できる。それはマムキー族[45] の部族長（mīr-i ʻaşīret）のディルリクであり，ディルリク地はヴァン州に属するエルジシュ Ercīş 県のサルス Ṣarıṣu 郷に設定されていた。以下，16 世紀中頃から 17 世紀末まで，マムキー部族長のディルリクの変遷を『ディルリク発給簿』から追ってみよう。

①1556 年，マムキー部族長のベフルル Behlūl は，父から相続した 7 つの荒廃村を「ティマール」として保有した[46]。

②1568 年，上述のベフルルがスルタン即位に伴う勅許状の更新手続を行った。ディルリクの種類は記載されず，「保有（taṣarruf）」とだけ記された[47]。

③1595 年 3 月，ベフルルが死亡。ベフルルの息子アリー ʻAlī が部族長となり，父の保有した 7 村を額が無記載の「ゼアーメ

42）DFE.RZ.d 34: 533.
43）A.{DVNS.MHM.d 60: no.233.
44）DFE.RZ.d 176: 549.
45）以下に引用する『ディルリク発給簿』ではマムキーの綴りが Māmekī/Māmikī, Māhūkī, Māmūkī の 3 パターンで記されている。マムキーの出自は文書史料ではクルド（Ekrād ṭā’ifesinden）と記されている（KK.d 156: 496）。Türkay 2001: 491 によるとクルド，Kırzıoğlu 1984: 30 によるとトゥルクメンである。
46）DFE.RZ.d 7: 382.
47）DFE.RZ.d 12: 1029–30.

ト」として授与された[48]。

④同年6月，故ベフルルのディルリクが，マムキー族とは無関係のピヤーレ Piyāle なる者に授与されたことが明らかになった。これまでディルリクは額が無記載であったが，この際に租税調査が行われ，2万アクチェのゼアーメトと記録された[49]。

⑤1596年，ピヤーレのディルリク保有は無効となり，再度ベフルルの息子アリーに父のディルリクが授与された。ディルリクも額が無記載の「ゼアーメト」に戻された[50]。

⑥1603年，アリーの兄弟アリージャン ʻAlīcān が部族長となり，兄弟のユスフ Yūsuf が保有した7村と枝村を「オジャクルク」として授与された[51]。

⑦1612年，アリージャンのディルリクを，アリーの息子デルヴィシュ Dervīş が相続した。これまでと同様，7村と枝村を額が無記載の「ティマール」として保有した[52]。

⑧1622年，デルヴィシュが死去。再び上述のアリージャンが部族長となり，7村と枝村を額が無記載の「ゼアーメト」として保有した[53]。

⑨1634年，引き続き，アリージャンは額が無記載の6村をディルリクとして保有した[54]。この時はディルリクの種類は記されず，「保有（taṣarruf）」とだけ記録された。

⑩1651年，前述のデルヴィシュの息子アリー ʻAlī が部族長となり，父と前述のアリージャンから相続した7村と枝村を額が無記載の「ティマール」として保有した[55]。

⑪1689年，アリーはスルタン即位に伴う勅許状の更新を行った[56]。

⑫1691年，アリーの息子ハサン Ḥasan が部族長となり，父から相続した7村と枝村を額が無記載の「ティマール」として保有した[57]。

マムキー部族長のディルリク保有の経過からは，ディルリクの種類や保有形態に拘らず，ディルリクの額が算出されることはなく，130年以上にもわたって租税調査が実施されなかったことがわかる。一度マムキー族とは無関係の者にディルリクが授与されたことがあり，その際，租税調査が実施され，ディルリク額が確定された。ただし農村・枝村単位の税額は示されず，総税額のみが記録されたため，どの程度正確な租税調査が行われたかは不明である。この後，上記ディルリクがマムキー部族長に戻されると，再びディルリク額は無記載となった。この一件からは，マムキー部族長のディルリクに関して，オスマン朝が租税調査を行う意図を持っていなかっ

48）DFE.RZ.d 176: 569.
49）DFE.RZ.d 169: 618.
50）DFE.RZ.d 176: 605–6.
51）DFE.RZ.d 290: 364. ベフルルの息子アリーの死後，部族長位をめぐる内紛が発生した。本来アリーの息子であるイブラヒム İbrāhīm が部族長位に就くべきところを，アリーの兄弟のユスフが部族長となった。部族長位をめぐるイブラヒムとユスフの争いが続いたが，ユスフが部族長位を兄弟のアリージャンに譲ると，アリージャンはイブラヒムを殺害した（KK.d 156: 496; DFE.RZ.d 365: 264）。この時，イブラヒムの部族長就任を上奏したのは，エルジシュ県知事でもヴァン州総督でもなく，ビトリス県知事であった。
52）DFE.RZ.d 365: 264.
53）DFE.RZ.d 412: 399.
54）DFE.RZ.d 552: 95. ⑨1634年，アリージャンがディルリクとして保有したのは「6村」であり，それまでマムキー部族長が保有してきた「7村と枝村」から減っている。⑩1651年，デルヴィシュの息子アリーが部族長となり，父であるデルヴィシュと前述のアリージャンから「7村と枝村」を相続したとあるため，⑨の時期，アリージャンが「6村」を，アリーが「1村と枝村」をディルリクとして保有した可能性が高い。
55）DFE.RZ.d 647: 291.
56）DFE.RZ.d 951: 196.
57）DFE.RZ.d 968: 423.

たことが読み取れる。オスマン朝下，マムキー部族長は勅許状により任命され，ミュルキイェト（mülkīyet，土地保有権）を認められつつ，代々部族長位にあったことが，①1556 年当時からすでに記録されている。マムキー部族長はミュルキイェトという権利により租税調査を免除され，自身が管理する税収を特殊なディルリクとして保有し続けたのである。

以上を整理すると，クルド系諸県におけるディルリクの特徴として以下の点があげられる。

第 1 に，オスマン朝の他のティマール制施行地域と同様に，クルド系諸県でも推定額のディルリクが見られた。推定額のディルリクとは，ディルリクの収入源となる農村や枝村からの税収が調査の対象とならないため，租税台帳に記録されない税源を意味した。通常，一般の県では，個々の農村や枝村の税額がそれぞれ推定と記録されたのに対し，クルド系諸県で特徴的なのは，郷や県単位の総税額がまとめて推定と記録されたことである。つまりクルド系諸県では郷や県単位で租税調査が実施されないままティマール制が実施されていたことになる。これはクルド系諸県をはじめとして，征服地の旧支配層がオスマン朝下でも地方行政の責任者となった地域に共通していた。

第 2 に，クルド系諸県では額が無記載のディルリクが存在したが，これは推定額によるディルリクと同様に，租税台帳に記録されない税源を意味した。額が無記載のディルリクは，ヴァン州に属するマムキー部族長のディルリクにも適用されたが，マフムーディー県とマムキー部族長の額が無記載のディルリクの事例を見ると，ティマール制というよりは一族による私的な土地保有に近い印象を受ける。ティマール制の名の下に土地保有に関わる権利が世襲されていたというのが実態であろう。

クルド側からすれば，特殊なティマール制とは，クルド系県知事とその関係者の間だけで県の税収を分配し，それ以外の者を排除するという意味で，オスマン朝以前からの社会秩序や土地に関わる権益を維持できる制度と見なされただろう。逆にオスマン朝からすれば，土地保有に関わる地域の慣習を容認する一方，その慣習をティマール制の下に統一していこうという意図があっただろうと思われる。

最後に，推定額のディルリクと額が無記載のディルリクのいずれも，租税調査が行われないために，租税台帳に記録されない税源であることは共通している。では，なぜ推定額と額が無記載という違いが生じたのだろうか。その答えは次の 2 つの事例から推測することができる。1 つはゲンジェ県の事例である。同県では県知事スルタン・アフメト・ベイの時代に租税調査が行われ，その結果をもとにディルリクが分配されたが，その後は租税調査が実施されなかったため，ディルリクの税源の額が更新されず，よってディルリクが推定額と記録されたと考えられた。同様にイスパイルト県でも一度だけ租税調査が行われたことが知られている。同県では租税調査の前はディルリクの額が無記載であったが，租税調査の後にはディルリクが推定額で記録され続けた。以上を考え併せると，一度租税調査が実施されたにも拘らず，その後，租税調査の対象とならずに記録の更新が出来なかったディルリクを推定額としたのではないだろうか。

おわりに

本稿ではアナトリア南東部のクルド系諸県でのティマール制の実施状況と一部のクルド系諸県における推定額および額が無記載のディルリクという特殊なティマール制について検討した。従来の研究では，17 世紀のオスマン朝の史料の記述に従い，クルド系諸県はティマール制施行により 2 種類に大別され

ると考えられていた。1つはティマール制が施行されたリヴァー，もう1つはティマール制が施行されなかったヒュキューメトである。

では，本稿で検討した結果をもとにティマール制の実施状況によりクルド系諸県を分類してみよう。県名の後の（A）はリヴァー，（B）はヒュキューメトを意味する。

①ティマール制施行：マズギルト（A），ペルテク（A），サクマン（A），チェルミク（A），ギルディカン（A），アタク（A），テルジル（A→B），チャパクチュル（A），クルプ（A），ベスヤン・ブジュヤン・ズィラン（＝メファリキン）（A），ビトリス（A→B）

②特殊なティマール制施行

1. 推定額のディルリク：ゲンジェ（B），ハンジュク（A），ミュキュス（A），シルヴィー（A）

2. 額が無記載のディルリク：イスパイルト（A），マフムーディー（B）

③ティマール制不施行：エイル（B），パル（B），デルズィニー（A），ハッキャリ（B），イマディエ（B），ジズレ（B），グルギル（A），ハゾ（B），ヒザン（B）

いくつかの例外を含むが，従来のように，大きくティマール制施行のリヴァーとティマール制不施行のヒュキューメトに分類することは可能である。しかし本稿で明らかになったように，クルド系諸県で実施されたティマール制の実態はより複雑であった。それを象徴するのが，①ティマール制施行と③ティマール制不施行に加えて，②特殊なティマール制施行の県の存在である。②特殊なティマール制施行のクルド系諸県では，租税調査が実施されないまま，基本的にクルド系県知事とその関係者だけにディルリクが分配された。さらにクルド系諸県では一族によるディルリクの世襲も認められたため，租税調査という中央の介入を受けることなく，何世代にも渡って同じ土地の税収を保有することが可能となった。特殊なティマール制とは，制度的にはティマール制の形を取ってはいるが，実態はクルド系アミールとその関係者による土地保有であったと考えられる。

このようにクルド系諸県におけるティマール制のあり方は一様ではなかった。ティマール制が施行されなかったクルド系諸県についても，オスマン朝はクルド系県知事とその関係者に他県でディルリクを授与することにより，彼らをティマール制に組み込もうとした。クルド系諸県に対するオスマン朝のティマール政策とは，第一にクルド系諸県にティマール制を導入することであり，第二にティマール不施行県のクルド系県知事とその関係者をティマール制に組み込むことであったといえる。ティマール制の実施状況や内容に差異はあっても，ティマール制を通じてクルド系諸県を体制内に統合しようとしたことは確かであろう。

16–17世紀のクルド系諸県における特殊なティマール制とは，一族内でのディルリクの世襲と租税調査を行わずにディルリクを保有したことである。しかしこの2つの特殊性はクルド系諸県で突然始まったわけではなく，類似する事例は16世紀以前のアナトリアやバルカンでも確認できる。例えば，15世紀のアルバニアでは，オジャクルクという語はないが，一族内でのディルリクの世襲と郷単位での推定額のディルリク保有の例を見出すことができる[58]。アナトリアでもオスマン朝に先行するカラマン君侯国の時代に，ユルトルクによるミュルク・ティマール（＝ディルリクの世襲）が存在したことが指摘されている[59]。

さらに16世紀以前のディヤルバクル地方については，次のような土地保有に関する記録が残っている。15世紀，アクコユンル朝の時代，クルド系アミールの一人，エイ

58）İnalcık 1987: 85–97.
59）Barkan 1980: 901.

ル・アミールのオジャクであるエイルの地（ülke）が，他の土地と併せてソユールガール（soyūrġāl）として授与された[60]。これによりエイル・アミールは世襲的な土地保有と不輸不入の権利を認められた。エイル・アミールに与えられたソユールガール勅令には「土地は記録されず，役人の立ち入りもない（marfū‘ al-qalam wa maqṭū‘ al-qadem）」という文言が記されている。この文言はその後のオスマン朝の時代にもヒュキューメトの権利を表わす文として使用され続けた[61]。事実，エイル・アミールはオスマン朝下でも「土地は記録されず，役人の立ち入りもない」ことを認められ，エイル県をヒュキューメトとして世襲的に管理した。以上からオジャクルクやヒュキューメトの用語の未使用に拘らず，制度の概念は先行する王朝から継承されたと考えるべきであろう。

クルド系諸県での特殊なティマール制は，さらに別の地域にも導入されることとなる。なかでも特徴的なのはボスニア州へのオジャクルクの導入であろう。16 世紀末からオスマン朝の西の辺境ではハプスブルク帝国との戦争が十数年続き，この戦いでボスニア州に属する多くの騎士が命を落とした。彼らの軍事的貢献に対して，オスマン朝は戦死者のディルリクが息子や兄弟などにより相続されることを許可し，一族のオジャクとして存続することを認めた[62]。ここにいたってオスマン朝の東西の辺境地域でオジャクルクが施行されることになった。オスマン朝は，一族によるディルリクの世襲という本来のティマール制にはない特権を与えることにより，辺境防衛体制を整えていったともいえよう。

本稿ではクルド系諸県におけるティマール制の実施状況と特殊なティマール制について考察した。しかし『ディルリク発給簿』の史料的特徴を十分に生かすことはできなかった。今後の課題として，特殊ではない通常のディルリクも含め，クルド系諸県におけるディルリクについてその内容を詳細に分析する必要がある。さらには中核地域のディルリクと比較検討しつつ，オスマン朝のティマール政策を体系的に明らかにする必要があるだろう。

参　考　資　料

◉未刊行史料◉

首相府オスマン文書館（Başbakanlık Osmanlı Arşivi）所蔵史料

A.{DVN 13/1

A.{DVNS.HADR.d: Hadariye Defterleri 1

A.{DVNS.MHM.d: Mühimme Defterleri 1, 2, 4, 6, 22, 60

A.{DVNS.MHM.ZYL.d: Mühimme Zeyli Defterleri 4

A.{NŞT.d: Tahvil (Nişan) Defterleri 1238

A.{RSK.d: Ruus Defterleri 1452, 1460, 1524

DFE.RZ.d: Timar Zeamet (Ruznamçe) Defterleri 5, 7, 12, 14, 15, 17/1, 22, 28, 33, 34, 36, 55, 58, 62, 65, 67, 73, 85, 86, 98, 101, 117, 118, 125, 128, 156, 169, 174, 176, 186, 195, 206, 212, 246, 279, 280, 290, 300, 322, 326, 331, 346, 352, 365, 381, 412, 437, 448, 501, 504, 510, 539, 552, 565, 571, 598, 608, 619, 621, 631, 647, 653, 679, 683, 690, 691, 695, 705, 749, 852, 951, 968

KK.d: Kamil Kepeci Defterleri 74, 75, 89, 156, 209, 213, 218, 222, 225, 229, 233, 236, 237, 248, 253, 262, 348, 349, 354, 356

MAD.d: Maliyeden Müdevver Defterler 7, 19, 563, 4659, 15402, 17642, 17983

TT.d: Tapu Tahrir Defterleri 64, 134, 208, 313, 617, 991

YB.04.d: Bulgaristan’daki Osmanlı Defterleri 203

トプカプ宮殿博物館附属文書館（Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi）所蔵史料

E. 8040/2

60）Minorsky 1937–39: 929.

61）İnalcık 2006: 126–8.

62）Filipović 1986. 同論文では『ディルリク発給簿』を利用した内容分析は行われていない。管見の限りでは，オジャクルク導入の 10 年後，『ディルリク発給簿』においてオジャクという語が見られなくなる（cf. DFE.RZ.d 679 ; DFE.RZ.d 683; DFE.RZ.d 691; DFE.RZ.d 705）。ボスニア州でのオジャクルクの継続については更なる検討が必要である。

◉刊行史料◉

'Ayn 'Alī Efendi. 1979. *Ḳavānīn-i Āl-i 'Oṣmān der Ḥulāṣa-i Meẓāmīn-i Defter-i Dīvān*, 1280A.H., Reprinted with Preface by M. T. Gökbilgin, İstanbul: Enderun.

İnalcık , Halil. 1987. *Hicrî 835 Tarihli Sûret-i Defter-i Sancak-i Arvanid*, Ankara: TTK.

Minorsky, V. 1937-39. "A Soyūrghāl of Qāsim b. Jahāngīr Aq-qoyunlu (903/1498)," *Bulletin of the School of Oriental Studies* 9: 927-60.

Sahillioğlu, Halil (ed.). 2002. *Topkapı Sarayı Arşivi H.951-952 Tarihli ve E-12321 Numaralı Mühimme Defteri,* İstanbul: IRCICA.

Sofyalı Ali Çavuş Kanunnâmesi: Osmanlı İmparatorluğu'nda Toprak Tasarruf Sistemi'nin Hukukī ve Mâlî Müeyyede ve Mükellefiyetleri, ed. by M. Sertoğlu, İstanbul: Marmara Üniversitesi Yayınları, 1992.

Šaraf Ḫān Bidlīsī. 1969. *Šaraf-nāma*, ed. by V. Vélïaminof-Zernof, Vol.1, 1st. ed., St. Petersburg, 1860, rep., Westmead.

◉参考文献◉

Afyoncu, Erhan. 1997. *Osmanlı Devlet Teşkilâtında Defterhâne-i Âmire (XVI-XVIII. Yüzyıllar)*, Doktora Tezi, Marmara Üniversitesi.

Aydın, Bilgin. 2004. "XVI. Yüzyıl Osmanlı Bürokrasisinde Tımar Tevcih Sistemi," *Osmanlı Araştırmaları* 24: 29–35.

Aydın, Dündar. 1998. *Erzurum Beylerbeyiliği ve Teşkilatı: Kuruluş ve Genişleme Devri (1535–1566)*, Ankara: TTK.

Barkan, Ömer Lutfi. 1980. "Osmanlı Devrinin "Eşkincülü Mülkler" i veya "Mülk Timarlar" ı Hakkında Notlar," *Türkiye'de Toprak Meselesi: Toplu Eserler 1*, İstanbul: Gözlem Yayınları, 897–904（idem, 1956. *Zeki Velidi Togan'a Armağan*, 61-70, İstanbul の再録）.

Barkan, Ömer Lütfi. 1979. "Timar", *İslâm Ansiklopedisi*, Vol. 12/1, İstanbul: Millî Eğitim Basımevi, 286-333.

Bayatlı, Nilüfer. 1999. *XVI. Yüzyılda Musul Eyâleti*, Ankara: TTK.

Bizbirlik, Alpay. 1993. "16. Yüzyılda Kulb Sancağı Hakkında Sosyal ve Ekonomik Bir Araştırma," *Osmanlı Araştırmaları* 13: 137–62.

Bizbirlik, Alpay. 1996. "16. Yüzyılda Tercil Sancağı Üzerine Notlar," *Osmanlı Araştırmaları* 16: 85–120.

Bizbirlik, Alpay. 1999. "16. Yüzyılın Ortalarında Atak Sancağı ve Sancak Beyleri Üzerine Notlar," *Tarih İncelemeleri Dergisi* 14: 109–33.

Filipović, Nedim. 1986. "Ocaklik Timars in Bosnia and Herzegovina," *Prilozi za Orijentalnu Filologiju* 36: 149–80.

Göyünç, Nejat. 1994. "XVI. Yüzyılda Doğu ve Güney-Doğu Anadolu'da Yönetim ve Nüfus," *Türk Kültürü* 370: 77–86.

Göyünç, Nejat. 1995. "Timar Tevcihleri Hakkında," *Osmanlı-Türk Diplomatiği Semineri 30–31 Mayıs 1994 Bildiriler*, 67–74, İstanbul.

Göyünç, Nejat. 1996. "Timar Ruznamçe Defterleri'nin Biyografik Kaynak Olarak Önemi," *Belleten* LX (227): 127–38.

Howard, Douglas. 1986 "The BBA Ruznamçe Tasnifi: A New Resource for the Study of the Ottoman Timar System," *Turkish Studies Association Bulletin* 10 (1): 11–9

Howard, Douglas. 1987. *Timar System and Its Transformation, 1563–1656*, Ph.D Dissertation, Indiana University.

İnalcık , Halil. 1980. "Osmanlı Bürokrasisinde Aklâm ve Muâmelât," *Osmanlı Araştırmaları* 1: 1–14.

İnalcık , Halil. 2006. "Autonomous Enclaves in Islamic States: Temlîks, Soyurghals, Yurdluḳ-Ocaḳlıḳs, Mâlikâne-Muḳâṭa'as and Awqāf," *History and Historiography of Post-Mongol Central Asia and the Middle East: Studies in Honor of John E. Woods* (J. Pfeiffer et al. eds.), 112–34, Wiesbaden: Harrassowitz.

Kırzıoğlu, M. Fahrettin. 1984. *Dağıstan-Aras-Dicle-Altay ve Türkistan Türk Boylarından Kürtler*, Ankara: Türk Kültürünü Araştırma Enstitüsü.

Türkay, Cevdet. 2001. *Başbakanlık Arşivi Belgelerine Göre Osmanlı İmparatorluğu'nda Oymak, Aşiret ve Cemaatlar*, İstanbul: İşaret Yayınları.

T. C. Başbakanlık Devlet Arşivleri Genel Müdürlüğü. 2000. *Başbakanlık Osmanlı Arşivi Rehberi,* 2nd ed., İstanbul.

Ünal, Mehmet Ali. 1999. *XVI. Yüzyılda Çemişgezek Sancağı*, Ankara: TTK.

齋藤久美子　2006a 「16–17 世紀オスマン朝下の東部アナトリアにおける「ユルトルク＝オジャクルク」と「ヒュクーメト」の成立」『オリエント』48(2): 47–65.

齋藤久美子　2006b 「16–17 世紀東部アナトリアにおけるオスマン支配――2 つの地方行政組織を例に」『日本中東学会年報』22(1): 63–86.

三沢伸生　2006 「「ティマール制」研究の展開」『西南アジア研究』64: 78–93.

付記：本研究は科学研究費補助金（課題番号 18279003）による成果の一部である。

原稿受領日―**2009** 年 **4** 月 **13** 日